



# 長野県看護大学学報

発行:長野県看護大学広報・交流委員会 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694 Tel.0265-81-5100  
ホームページ (http://www.nagano-nurs.ac.jp/)

## 大学院博士後期課程に健康資源開発看護学領域開設



〔美しい里山の風景：大鹿村〕

### 目次

|   |                |
|---|----------------|
| <b>&lt;大学院博士後期課程に健康資源開発看護学領域開設&gt;</b>              |                |
| 北山秋雄教授 里山看護学を語る.....                                | 北山秋雄 2         |
| 大学院入試部会の活動と課題.....                                  | 北山秋雄 5         |
| <b>&lt;看護実践国際研究センター活動報告&gt;</b>                     |                |
| <b>異文化看護国際研究部門</b>                                  |                |
| 中国医科大学交流会のご報告.....                                  | 飛弾浩一・喬炎 9      |
| <b>&lt;教員活動報告&gt;</b>                               |                |
| NHS TRUSTに見るQOLを追求した認知症ケア視察研修 in マンチェスター に参加して..... | 楠本祐子 10        |
| Helsinki大学(フィンランド)での言語学史学会に参加して.....                | 江藤裕之 12        |
| 思春期ピアカウンセラー養成講座の報告.....                             | 林 陽子 13        |
| <b>&lt;教育実践活動報告&gt;</b>                             |                |
| <b>平成19年度サモア国立大学ー長野県看護大学 学生交換留学事業と看護実習の報告</b>       |                |
| 学生交換留学事業と看護実習の概要.....                               | 田代麻里江 15       |
| 学生交換留学プログラムに対する感謝.....                              | セイブア・ツツウィラ 16  |
| 新しい環境・日本における私の体験.....                               | ベテリ・ソロ 17      |
| カルチャー・ショックを体験して.....                                | 荻原 彩 18        |
| 言葉というツール～サモア人留学生と過ごした16日間から～.....                   | 熊谷亜由美 19       |
| カルチャー・ショックから学んだアサーティブコミュニケーション.....                 | 澤田いずみ 19       |
| 相互理解に必要なこと～素直に自分を表現する～.....                         | 藤田朋香 20        |
| <b>&lt;広報・交流委員会報告&gt;</b>                           |                |
| 委員長挨拶.....  | 江藤裕之 21        |
| 第1回公開講座：松崎緑先生「心の病をもつ人々と共に生活するために」.....              | 田中真木 21        |
| 第2回公開講座：喬炎先生「再生」、古代ギリシア神話から現代医療の現場へ」.....           | 高濱圭子 22        |
| 第3回公開講座：岩月和彦先生「サプリメントの基礎知識」.....                    | 宮澤美知留 22       |
| 大学説明：オープンキャンパス、鈴風祭における大学説明.....                     | 酒井久美子、大脇百合子 23 |
| 大学説明：高校での説明・模擬授業、高校生の大学見学.....                      | 大脇百合子、酒井久美子 24 |
| ホームページ担当からの報告.....                                  | 太田規子 24        |
| <b>&lt;同窓会よりのお知らせ&gt;</b> .....                     | 25             |
| <b>&lt;事務局からのお知らせ&gt;</b> .....                     | 26             |
| <b>&lt;新企画：付属図書館からのお知らせ&gt;</b> .....               | 28             |

## 北山秋雄教授 里山看護学を語る

北山秋雄

今年4月で開学14年目を迎える長野県看護大学は、看護師や保健師、助産師を養成する学部教育だけでなく、看護の質の向上に貢献できる人材を育成する大学院教育も行っています。本学大学院は、看護学に関する理論と実践を専門的かつ学際的に探究しながら、教育・研究能力と看護実践能力を育成することを目的としており、博士前期課程（修士課程）と博士後期課程（博士課程）があります。どちらの課程も開学当初から主として看護の対象別に4つの専門領域（看護基礎学領域、達成看護学領域、育成看護学領域、広域看護学領域）と専門関連領域に分かれていましたが、2006年度から博士前期課程に健康資源開発看護学領域が新たに開設され、2008年度からは博士後期課程にも健康資源開発看護学領域が加わることになりました。

それを機に今回は、健康・保健学講座の北山秋雄教授に健康資源開発看護学領域の開設について、また、その中核となる里山看護学についてお話を伺いました。

\* \* \* \* \*

**本学大学院に健康資源開発看護学領域が開設されたきっかけ**

**編集部** 来年度から大学院博士後期課程にも健康資源開発看護学領域が開設され、前期課程、後期課程ともに5つの専門領域が整います。そこでまず、健康資源開発看護学領域が生まれたきっかけをお聞かせください。

**北山** 21世紀に入ると、コミュニティ・ディベロップメント（地域社会開発）ということが言われ始め、田中県政の時代にその考え方と手法を県の行政にも取り入れようという方針が打ち出されました。ご存知のように、長野県は長寿県であると同時に過疎の県でもあります。ですから、地域づくりはとても重要です。

そのような県の取り組みの一環として、県立大学である長野県看護大学もカリキュラムを中心とした教育の変革が求められたのです。ところが、カリキュラムを含めて学部教育の改革は大変難しく、一朝一夕にはできません。そこで比較的小規模でも取り組める大学院改革から行おうということになりました。それだけでなく、コミュニティ・ディベロップメントは私たちが暮らす地域を再生したり地域全体を活性化したりしていくことにつながるものです。ですから、看護職者を養成する学部教育よりも、看護の質向上に貢献できる人材の育成を目的とした大学院教育にコミュニティ・ディベロップメントの考え方を取り入れて、大学院改革を考えていくのがいいだろうということになったのです。

幸いなことに、本学大学院のコミュニティ・ディベロップメントの講義は、地域医療・農村医学に造詣が深く、長年、南相木村の診療所長であり佐久総合病院にも所属しておられる色平哲郎先生が非常勤講師として担当してくださいました。行政が地域づくりを行っていきうえで、住民サイドに立った医師の力はとても大きいのです。その意味でコミュニティ・ディベロップメントに精通し、ご自身が積極的な活動を行い、本庁との人脈もある色平先生の講義が開講されることは、本学に強み・メリットとなると考えました。



**編集部** 県はどのような方針を立てたのでしょうか。

**北山** 平成15年9月18日に、本庁は「県立看護師等学校養成所あり方検討会」を立ち上げ、その検討会で看護職者の養成機関が今後どのような教育を行っていくべきか、様々な改革方針が検討されました。そのなかで長野県看護大学の教育改革が中核として位置づけられ、「看護大学は地域貢献と特色ある大学づくりをめざし、新たな理念と目標を設定し、そのカリキュラムと機構を改革する」ことが謳われたのですが、これは大学全体を揺るがす出来事でした。この提言により、本学にとって大学改革が至上命令となったのです。

この「県立看護師等学校養成所あり方検討会」の座長は、萌気園浦佐診療所長（新潟県南魚沼市浦佐）の黒岩卓夫先生が務められました。浦佐診療所の母体である萌気会は、地域の保健・医療・福祉に関する先進的な取り組みをしているところなのですが、県立大学としての長野県看護大学の改革について黒岩先生が強調されたのは、県民益を重視した「地域貢献」と「特色ある大学」づくりということでした。そのためには県民のニーズを発掘し、農業や立地条件を利用した人材育成と研究が不可欠であるとおっしゃっていました。

そこで本学では、黒岩先生のご提案を取り入れて、大学改革、特に大学院改革に着手し、まずキーワードを探すことから始めました。

**「里山看護学」の誕生**

**編集部** 「特色ある大学」を打ち出していくには、キーワードは重要ですね。どのようなキーワードが考えられたのでしょうか。

**北山** 先ほども言いましたように、長野県は1人当りの

老人医療費が最も少ない長寿県ですが、同時に過疎の地域が増えている県でもありますから、「過疎看護」という案も出たのです。でも、「過疎看護」ではあまりにも暗すぎるし、地域看護学との違いも明確にする必要がありました。

**編集部** そうですね。過疎対策に取り組むことは重要ですが、大学にまで過疎化の波が押し寄せてきそうですが、

**北山** ああでもないこうでもないと考えているうちに、長野県が全国に先駆けて取り組んできた農村医学のことが頭に浮かんだのです。農村医学は1940年代後半、外科医であった若月俊一先生が院長をされていた佐久総合病院の地域医療から生まれた学問ですが、その基礎となっているのは、農民とともに農民の健康を守ろうという運動であることはよく知られています。佐久総合病院で始まった地域医療は、すべての村民の健康管理と集団検診が注目されていますが、重要なことは地域のニーズから生まれ、地域の自然を活かしながら発展していったということです。その中心にあったのは農業です。

農業と聞くと、アルプスに囲まれた信州の山村の風景が目には浮かびませんか。そこで思いついたのです。キーワードは「里山」だと。里山は村一地域一の原因風景ですよ、里山というと何ともいえない温かく安らぐような感じがしませんか。

**編集部** 確かに、過疎というと暗いイメージですが、里山は何だか温かい感じがしますね。

**北山** そう、温かい感じがしますよね。里山は人と自然の原点なのです。そこでは人と自然が共存し、持続した経済的な営みもあります。

「あり方検討会」の黒岩座長も、看護職者を養成する機関のあり方について、次のような考え方を示しておられました。それは、信州は日本の屋根と言われ、その立地条件は自然環境の豊かさというプラス面だけでなく、労働や健康に対してマイナスに働く面もあるけれど、信州の人々はそれを克服し、特色ある教育や行政を生み出してきた。このように、風土や人間性、生活に密着した保健活動がこれからは求められる、ということです。

私たちは、信州の地で育まれた地域医療や農村医学のような先人の優れた遺産を、看護の立場に立って受け継いでさらに発展させていかなければなりません。

**編集部** 看護学には以前から地域看護学という領域があって、本学の大学院にも、広域看護学領域の中に地域看護学分野がありますが、それと健康資源開発看護学領域の里山看護学分野とは、どのように違うのでしょうか。

**北山** 地域において看護を实践する地域看護は、地域経済の持続的発展（地産地消）、自然環境問題（生態系への影響）、農業の重要性（健康への寄与）を必ずしも考えていなかったと思うのです。また、里山看護学は山間僻地や島嶼などを対象エリアと考えていますから、その点が大きく異なります。

ちょっと話が脇にそれますが、実は、里山看護学分野が属している健康資源開発看護学領域の「健康資源開発看護

学」というネーミングは、深山智代学長のアイデアなのです。

健康資源開発看護学、まあ里山看護学でもいいですが、それがめざすのは文字通り里山にある健康資源を発見し開発して、それらの健康資源を人々の健康に役立てることで、すなわち、里山看護学においては、健康、スピリチュアル、ウェルネスなどが重要な概念になりますし、生活文化（暮らし）や食生活、森林や温泉といった天然資源など今まで健康の視点からは見てこなかったようなものを、地域の人々の健康との関連から見たいと思っています。そして、地域における人と人とのつながり、人づき合いもひとつの資源と考え、それらと地域の自然とを結びつける視座も検討していきたいと思っています。

西洋では、人間は自然と対峙して生きてきましたが、日本人には自然とともに生きるということが身についているし、自分たち人間も自然の一部としてうまく調和を図っていくというのが、日本人の生き方のように思うのです。そういったことを包括する概念が、私にとっては「里山」だったということです。

**編集部** 自然のなかで人間の健康が育まれていくという考え方にはとても納得できます。具体的に里山看護学では、どのようなことを扱うのでしょうか。

**北山** 先ほど里山には持続した営みがあると言いましたが、大学院のシラバスにも書いてあるように里山看護学では、里山を「限定された地域における人間と自然との持続可能な相互依存関係」と捉えています。ですから、まず里山の様々な成立要件、つまり自然的、人口学的、保健システム論的、社会的、文化的な成立要件を明らかにします。その上で、里山における健康資源の発見と開発のための視座と方法論の確立をめざします。そして、それらの方法論によって長野県の農山村の特性を明らかにして、その健康資源を人々の健康や長寿、繁栄に役立てていきたいと思っています。里山看護学はそのための学問なのです。



#### 健康資源開発看護学領域のこれから

**編集部** なるほど。まさに地域に密着した看護学になるのですね。では、その健康資源開発看護学領域・里山看護学分野の今後の展望をお聞かせください。

**北山** それは何と言っても、新しい長野モデルを作りたい

ということです。看護における研究や人材育成の新しいモデルは、従来のシステムを変えなければ生まれてきません。そこで、本学の大学院教育で健康資源開発看護学の研究に取り組むことによって従来のシステムを改革し、新しい長野モデルを作りたいと思っています。このモデルが完成すれば、長野県だけでなく近隣の岐阜県や新潟県など、長野県に似た特性をもつ県でも使うことができるでしょう。

長野県の立地条件を考えれば、これから迎えるのは間違いなく高齢と過疎の時代です。長野県には過疎化傾向にある地域がたくさんあります。そのような地域を人が住んでいける地にしなければなりません。なぜなら、都市に人が暮らし都市が生きていけるのは、里山があるからです。里山に持続した人の営みが保たれてこそ都市は生きていけるのです。「里山が荒廃すれば都市は滅びる」ことは歴史が証明済みです。

**編集部** 北山先生は具体的にどのようなモデルを構想していらっしゃるのですか。

**北山** 基本は、従来の保健師業務を診療所で行うということです。そして、そのために4つの柱を考えています。1つ目はプライマリーケアいわゆる初期診療ができる看護職者を診療所に配置することです。とにかく、初期診療を行いトリアージができる能力（コンピーテンシー）が重要なのです。2つ目はヘルスプロモーションができる人材を配置すること、3つ目は地域のことに精通し、その地域にとけ込んで地域活動が行える看護職者を過疎の診療所に配置すること、4つ目はコンピュータ・リテラシー（パソコンを使いこなせる能力）のある看護職者を配置すること、です。

過疎化傾向にある地域では、その地域に暮らす人々の健康を支える医師の確保が難しいのが現状です。恐らく、これから先はますますこのような地域には医師は来てくれなくなるでしょう。そこで、質の高い「里山ナース」つまりプライマリーケアとヘルスプロモーション、地域にとけ込んだ地域活動が行え、コンピュータ・リテラシーのある看護職者を大学院で育成する必要があるのです。特に本学のように、設置主体の県から地域貢献が求められ、まさに里山の中に立地している大学には、質の高い「里山ナース」のみならず、その里山ナースを育てる教員を養成する専門領域がなければならないと考えています。

過疎の村では健康はライフラインなのです。地域に暮らす人々の健康が保障されていなければ経済活動を行うことなどできません。自分が暮らす地域では初期診療の体制はどうなっているのか、そこで対応できないときに二次医療圏へはどのように送られるのか、そういうことがわかっていれば住民は安心できます。地域が活性化するためにも、人々が健康を維持・増進し安心して暮らせるようなシステムを、看護が整えなければならないと思います。そこで、そのようなシステムを開発し支えていける人材を育成するために、博士課程での教育・研究が重要だと考えました。

しかし、このような取り組みも長野県の中だけでやって

いたのでは、狭い範囲の小さなものになってしまいます。私は、里山は日本だけにあるものだとは思っていません。開発途上国では先進医療が十分に行き届かない中で、自然と共存しながら生きていこうとしています。そのような世界のそれぞれの地域と交流し、自然と共存することによって人々の健康と地域の活性化に寄与するという考え方でモデルを、この信州の地から発信していきたいと思っています。

#### 健康資源開発看護学領域開設に当たって苦労したこと

**編集部** 日本の屋根と言われる長野県から世界に向けて「長野モデル」が発信されることを思うとワクワクします。既に修士課程には里山看護学を専攻する院生がいますが、来年度からはそこに博士課程の院生も加わります。これから徐々に「里山ナース」が増えていきますが、ここまで来るには様々なご苦労がおりだったと思います。どのようなことにご苦労されましたか。



**北山** そうですね、一番困ったのは健康資源開発看護学領域のメンバーに地域活動・地域づくりの実践者、つまり地域で医療・看護の実践活動をしたことのある教員がいないということですね。これは健康資源開発看護学領域を専攻してくれる大学院生をリクルートする上で、大きなネックになりました。実践を通しての人的つながりがないので、大学院を志望する将来の「里山ナース」を探したり、研究のフィールドを開拓したりするのが難しいです。

でも、色平先生のように「里山看護」を理解して下さって「それはいい」とおっしゃってくださる先生や、佐久総合病院などにとっても協力的な施設や地域もあるので、少しずつ人探しをしたりフィールドを広げたりしていこうと思っています。

それから、今後は地域において遠隔看護がとても重要になってくることは間違いありませんが、これは従来の通信手段であった電話だけでは実践することが難しいです。顔が見えて声が聞こえる、画像と音声で双方向のやりとりができないと効果がありません。

遠隔医療は大きな病院と地域の診療所がつながっているものなので、言うなれば点と点のつながりですが、遠隔看護は、大きな病院と地域の診療所がつながっているだけでなく、地域の人々の健康を守るために、診療所や訪問看護ステーションと地域住民の家々をつなぎ、その人の病気だけでなく生活全般をサポートするということです。地域で

生活する人々を24時間見守りしていくのが遠隔看護の役割です。この点が遠隔医療と遠隔看護の大きな違いです。

現在、通信インフラが目覚ましい進歩を遂げています。国の政策として2011年7月24日までに地上デジタル放送いわゆる地デジに移行するので、全国津々浦々まで高度通信網が整備されますから、それを積極的に遠隔看護に活用していけるようになることが期待されます。

将来的には、遠隔看護（テレ・ナーシング）と里山看護をドッキングさせていこうと考えています。遠隔看護はひとつの看護実践のツールのひとつですが、里山看護を支える強力なツールだと思っています。

**編集部** 長時間にわたり大変興味深い内容を詳しくお話しくださりありがとうございました。最後に、本学教職員や地域の皆さまにお伝えしたいことがございましたら、一言お願いします。

**北山** 健康資源開発看護学領域が本学大学院に開設されるきっかけになったのは、地域を取り巻く情勢が変化し、それに伴って看護大学も単に優秀な看護職者を輩出するだけでなく、大学のあり方そのものに変革が求められたからです。大事なことは、本学は一体何をめざすのかということです。大学が組織として何らかのものに向かっていくためには、目標とビジョンと戦略がなければなりません。そして、大学の目標もビジョンも戦略も組織を支える全員で共有する必要があります。

看護に対する県民の負託に応えるとともに、地域のもてる力を活かすためには、教職員の意識改革と長期的視点に立った人材育成が肝要と信じています。これからの一層地域の皆様から愛される大学であり続けるとともに、人も物も資金も引き寄せるマグネット大学として発展することを願っています。

\* \* \* \* \*

近頃、救急搬送された人がいくつもの病院から受け入れを拒否され、ようやくたどり着いた病院で亡くなってしまったというような痛ましいニュースを、たびたび聞くようになりました。ニュースとして流れるのは、その人が亡くなってしまったからで、もしかしたら、救急車に乗りながら病院をたらい回しにされ、辛く悲しい思いをしたことのある人は、想像以上に大勢いるのかもしれませんが。大きな病院がある街に住んでいても、そんなニュースを聞くと「怖い」と思ってしまいますから、救急体制が整っていない地域に暮らす人は、もっと深刻な思いになるでしょう。

里山の風景は本当に美しいと思います。でも、その美しさの陰で、そこに暮らす人たちの安心や安全が犠牲になっているとしたら、北山先生がおっしゃるようになずれ里山は荒廃し、都市の機能もバランスを失っていくのだと思います。いざというときだけでなく、平日頃のちょっとした

ことにも対応してくれる人と物そして情報があること、それが安心の源であるような気がします。

今回、ご多忙中にもかかわらず、快くインタビューに応じてくださいました北山先生に心から感謝申し上げます。たくさんの資料をご持参になり、熱っぽく「里山看護」について語るご様子が印象的でした。短期間の在宅介護の経験しかない私にとって、看護の立場から地域の活性化を考えることは、正直なところとても難しいことです。でも、北山先生のお話を伺いながら、今、自分にできることは何なのか、きちんと考えてみようと思いました。

文責：水崎知子

（本学教員：生活援助学講座専任講師・広報／交流委員）

## 大学院入試部会の活動と課題

北山秋雄

本学は開学当初から、下記のように、看護実践に関する将来の指導者、看護学を発展させることのできる教育者及び研究者の育成を教育理念・教育目標に掲げ、学部が完成するのを機に1999年度に大学院看護学研究科博士前期課程（修士課程2年制）を、修士課程の完成にあわせて2001年度には博士後期課程（博士課程3年制）を設置しました。さらに、2002年度に小児看護専門看護師コース、2003年度に老人看護専門看護師コースを開設しました。

本大学院は、学際的な視野に立って、幅広くかつ洗練された学識を授け、人格的に統合された人間性とともにも、柔軟な思考による創造性豊かな研究能力および専門性の高い看護実践に必要な能力を併せ持つ人材を育成し、もって看護学の発展に寄与することを教育理念としている。

大学院博士（前期）課程の目標は、高度な能力を持つ、人材を社会に送り出すこと、すなわち、社会におけるケアの質を高め、他職種と協力し、その中核者として機能し、看護教育に携わることの出来る有能な人材の育成である。また、大学院博士（後期）課程は、創造性豊かな高度の研究能力を有する人材の養成、すなわち、日本のみならず世界の看護学の発展に寄与できる人材の育成、大学院教育をも担える教育者の養成を目指している。

本学大学院入試部会は、このような教育理念・教育目標に相応しい大学院生の募集方法、入学者の選抜方法等について審議し実施しています。以下にその活動と課題について紹介します。なお、本文は自己点検・評価報告書一平成

18年度大学基準協会加盟判定審査及び認証評価結果報告—をもとに加筆・修正して作成しました。

### 1 学生の募集方法と入学者の選抜方法

本学では開設当初から、将来の看護実践に関する指導者、看護学を発展させることのできる教育者及び研究者の育成を教育理念・教育目標に掲げていたため、大学院における学生の募集は、広い視野に立って専門分野の学識を深め、将来、看護実践、看護教育、看護管理、看護行政等における指導的立場で活躍する、臨床経験を積んだ向学心の高い看護職者を視野に入れて行っています。

博士前期課程の募集は、募集人員16人で、一般選抜、特別選抜の2方法で行われています。大学院受験資格の有無を認定する方法として、入学選抜試験に先駆けて「出願資格事前審査」が行われています。この「出願資格事前審査」による大学院受験資格の有無を認定する方法は、短期大学、高等専門学校、専修学校、各種学校の卒業者及びその他の教育施設の修了者で大学資格を有していない者に、勉学意欲の旺盛な社会人等に対して最大限の門戸を開く方策であり、2001年度から実施されています。その審査基準は、

- (ア) 看護師、保健師、助産師のいずれかの資格を有するもので、以下の(イ)から(キ)のうち2つを満たすものです。
  - (イ) 看護師、保健師、助産師のいずれかの資格取得後実務経験が5年以上の者
  - (ウ) 研修学校(厚生労働省、看護協会、県など公共又はそれに匹敵する機関の研修学校)又は継続教育(管理者コース)などを修了している者
  - (エ) 業績(査読ある学術雑誌への掲載、学会の発表の経験)を有する者
  - (オ) 英語のレベルが実用英語技能検定2級(TOEFL460点、TOEIC471点、その他同等)以上の実力を有する者
  - (カ) 認定看護師の資格を有する者
  - (キ) 国際協力機構(JICA)、NPO法人等の国際協力機関に所属して、海外で2年以上の実務経験を有する者
- 特に(キ)は、開学当初からの本学の英語重視の教育方針や本学の所在地である駒ヶ根市にJICA(国際協力機構)のJOCV(青年海外協力隊)訓練所があり、そうしたキャリアを持った志願者が比較的多いことから、2008年度募集から新たに審査基準として取り入れました。

また特別選抜は、「出願資格事前審査」による大学院受験資格認定を条件に現在の所属長の推薦を受け派遣される者(当該施設に所属しながら就学する者)を対象にして、試験科目の「英語」を免除して選抜する方法です。この方法は2004年度2次募集から実施されています。その主な背景として、博士前期課程志願者数が減少傾向にあったこと、これまで英語が可否のハードルになっていたこと、向学心のある臨床看護職者の学習を支援し派遣する職場の看護の質向上に寄与する必要性あること、等が挙げられます。この特別選抜の英語免除による入学者に対しては、入学直後

全員に英語の実力試験を行い、一定の得点に達しない者に語学の科目の履修、専門科目などにおける看護学の英語文献講読を積極的に行うこと、など入学後の英語の指導体制も検討・整備されました。

なお、専門看護師コース受験者も修士課程受験者と同様の試験科目が課されています。

博士後期課程は、募集人員4人で、国立大学と同じ出願資格で一般選抜が行われています。なお、一般選抜による大学院受験には必ずしも看護師免許等を必要としません。

表1-1 大学院入試の志願状況(前期課程)

| 年度   | 前期課程 |      |      |      |        |
|------|------|------|------|------|--------|
|      | 募集人員 | 志願者数 | 入学者数 | 志願倍率 | 充足率(%) |
| 1999 | 16   | 24   | 18   | 1.50 | 113    |
| 2000 | 16   | 19   | 11   | 1.19 | 69     |
| 2001 | 16   | 20   | 13   | 1.25 | 81     |
| 2002 | 16   | 22   | 13   | 1.38 | 81     |
| 2003 | 16   | 15   | 9    | 0.94 | 56     |
| 2004 | 16   | 10   | 9    | 0.63 | 56     |
| 2005 | 16   | 11   | 10   | 0.69 | 63     |
| 2006 | 16   | 15   | 15   | 0.94 | 94     |
| 2007 | 16   | 16   | 14   | 1.00 | 88     |
| 全体   | 144  | 152  | 112  | 1.06 | 78     |

表1-2 大学院入試の志願状況(後期課程)

| 年度   | 後期課程 |      |      |      |        |
|------|------|------|------|------|--------|
|      | 募集人員 | 志願者数 | 入学者数 | 志願倍率 | 充足率(%) |
| 1999 |      |      |      |      |        |
| 2000 |      |      |      |      |        |
| 2001 | 4    | 13   | 6    | 3.50 | 150    |
| 2002 | 4    | 4    | 3    | 1.00 | 75     |
| 2003 | 4    | 3    | 3    | 0.75 | 75     |
| 2004 | 4    | 3    | 2    | 0.75 | 50     |
| 2005 | 4    | 3    | 3    | 0.75 | 75     |
| 2006 | 4    | 2    | 2    | 0.50 | 50     |
| 2007 | 4    | 3    | 1    | 0.75 | 25     |
| 全体   | 28   | 31   | 20   | 1.11 | 71     |

博士前期課程の志願状況は、開設当初に比べて減少し、2003年度が約0.9倍、2004、2005年度が約0.6倍、2006、2007年度が約1.0倍です(表1-1)。博士後期課程の志願状況は、開設当初に比べて減少し、2001年度以来定員4人に対して約3人(0.75倍)の状況が継続しています(表1-2)。志願者は、社会人が多く、本学卒業生が志願者の半数を占める年もあります。また、近年志願者が少なく定員確保ができていません。広く社会人を受け入れる方法を行っているにも関わらず志願者が少なく定員に達しない理由として、他の都道府県における看護系大学院の開設があげられますが、本学大学院の教育内容の広報不足、修業年数を3年に伸ばした場合の経済的軽減措置の欠如なども影響していると考えられます。また、看護職者が学習意欲を持っていても、管理者や上司の理解を得て在職のまま学習することが困難な職場も多いことも事実です。したがって、看護職者が大学院で学習することの理解を得るために職場へのPRを広く行い、併せて同窓会等を活用したり、卒業研究で指導した卒業生に各教員が個別にPRしたりすることも必要です。さらに、入学後の社会人受け入れのための昼夜開講などの学習環境調整にとどまらず、カリキュラムの改革、サテライトキャンパスの開設、遠隔授業の実施等も必要と思われる。

## 2 門戸開放

本学は、他大学の大学院生に対する「門戸開放」に対応していません。今後、文部科学省が平成20年度から「戦略的大学連携支援事業」として国公私を通じ、複数の大学が大学院研究科等を共同設置できる仕組みを後押しすることから、その前段階として、県内他大学との単位互換協定の締結も視野に入れた対応を検討する必要があると思います。

## 3 社会人の受け入れ

社会人学生の就学に関する特別措置は、博士前期課程及び博士後期課程共に2001年度から実施されています。2007年度現在在学している学生数は、修士課程が一般学生14人に対して社会人学生17人、博士後期課程は10人全員が社会人学生です。博士前期課程においては、一般学生と社会人学生との比率がほぼ同率であるために昼夜・土曜日、長期休暇中に授業時間を調整し開講実施しています。

## 4 科目等履修生、研究生等

科目等履修生、研究生等については、ホームページ、広報により公募し向学心のある社会人等に対して最大限の門戸を開いています。

科目等履修生については、長野県看護大学大学院科目等履修生規程に必要な事項が定められており、2000年度から門戸が開かれています。現在までの科目等履修生は、対象科目数17科目、履修生は、毎年1~2名です(表2)。

研究生については、長野県看護大学研究生規程に必要な事項が定められており、2002年度から門戸が開かれています。

す。これまで在籍した研究生は毎年1~2名です(表3)。

表2 科目等履修生 (大学院)

| 年度   | 人数 | 履修科目数 | 履修科目名  | 対象科目数 |
|------|----|-------|--|-------|
| 2001 | 2  | 3     | 看護心理学<br>老年看護学実習<br>老年看護学演習I(C)                                    | 11    |
| 2002 | 0  | —     | —  | 11    |
| 2003 | 1  | 1     | 統計学特講  | 13    |
| 2004 | 1  | 1     | 老年看護学特論  | 18    |
| 2005 | 2  | 5     | 統計学特講<br>地域看護活動論<br>看護教育・援助論<br>看護管理<br>看護基礎学特論                    | 18    |
| 2006 | 4  | 5     | 地域・家族援助論<br>地域看護活動論<br>看護倫理<br>コミュニティ・<br>ディベロップメン<br>ト論特講<br>看護管理 | 21    |
| 2007 | 0  | —     | —  | 17    |

表3 研究生

| 年度   | 人数 | 受講講座           |
|------|----|----------------|
| 2002 | 1  | 心理学            |
| 2003 | 1  | 小児看護学          |
| 2004 | 1  | 地域看護学          |
| 2005 | 2  | 生活援助学<br>成人看護学 |
| 2006 | 2  | 生活援助学<br>成人看護学 |
| 2007 | 1  | 母性看護学          |

今後の課題として、科目等履修生に関しては、現在の対象科目数17科目をさらに拡大し門戸を開くこと、また看護職者だけでなく、行政機関、医療福祉関係、健康教育機関などで活躍する向学に燃えた社会人へのPRを、本学ホームページなどを積極的に活用したり、社会人の再教育として特別に配慮した教育プログラムの開発・実施したりすることも検討していく必要があります。

## 5 外国人留学生の受け入れ

現在までに受け入れた外国人留学生は、2005年度に博士前期課程に入学した中華人民共和国からの私費留学生1名であり、過去の同課程における入学生の0.9%に相当します。海外の大学院を修了した留学生は過去に受験した例が

ないため、単位の認定は実績がありません。

今後の課題として、外国人留学生を受け入れることは、留学生本人を成長させるだけでなく、他の大学院生にも良い影響を与えることも考えられます。そのため、今後は積極的に外国人留学生を受け入れることが望ましい。しかしながら、現状においては、入学試験は外国人留学生も日本人受験生と同等の条件で審査されます。学生の質を維持するために受験資格を緩和することは望ましくないものの、日本語による表現の乏しい外国人留学生に対して特別の配慮をすることは、本大学院の教育実践においてメリットがデメリットを凌駕することも考えられます。さらに、本学においては外国人留学生に対する奨学金や助成金といった経済的援助手段が用意されていません。外国人留学生が継続して在学することは、本学に好ましい影響もたらすことが期待できることから、奨学金や助成金などによる経済的援助を検討し学びやすい環境の整備を推進する必要があります。

## 6 入学定員の現状と対応

大学院が開設された1999年度から2007年度までの入学試験の志願状況を表1に示します。募集人員に対する志願者数の割合（志願倍率）及び入学した者の割合（充足率）を百分率で示しました。博士前期課程においては、志願倍率は1.50から0.63、充足率は113%から56%までそれぞれ推移し、全体での志願倍率は1.06、充足率は78%でした。一方、博士後期課程においては、志願倍率は3.50から0.50、充足率は150%から25%までそれぞれ推移し、全体での志願倍率は1.11、充足率は71%です。また、2007年度における定員に対する在籍学生の割合（表4）は、博士前期課程が97%、博士後期課程が83%です。

博士前期・博士後期両課程において、開設初年度は募集人員を大きく上回る志願者を得たものの、その後の志願倍率は低減しています。その原因のひとつとして他の都道府県において看護系大学院が続けて開設されたことが考えられます。そのような現状を鑑みて、本学大学院においては、募集人員の削減も検討されたものの、県外からの大学院進学者を競争的に獲得するのではなく、特に現場に就業している看護職者の能力向上の必要性を認識しました。そこで、本学大学院では社会人の就学を促すことを目的に夜間やその他の特定の時間または時期において授業や研究指導を行うように配慮しています。さらに、2004年度2次募集から、所属する施設長の推薦を受けて派遣される者（当該施設に所属しながら就学する者）を対象にして、試験科目のうち「英語」を免除する特別選抜を行っています。

また、博士前期課程においては志願者数が募集人員以下である場合であっても、受験者全員を合格させたことはありません。それは合格基準を満たしている受験者のみを合格させているためであり、それにより本学大学院における学生の質が維持されていることが考えられます。

本学大学院は博士前期課程、博士後期課程とも看護学専

攻であり、開学当初から4つの専門領域（看護基礎学、達成看護学、育成看護学、広域看護学）及び専門関連領域で構成されていましたが、社会のニーズを視野に入れた教育研究組織の改革のひとつとして、2006年度に博士前期課程に5つ目の専門領域として健康資源開発看護学領域（地域に根ざして地域の諸資源を健康に生かすことを看護の視点から研究する領域）里山看護学分野を設け、2008年度募集から博士後期課程に同様に健康資源開発看護学領域 里山看護学分野を設けることとなりました。

表4 2007年度大学院研究科の学生定数及び在籍学生数

| 看護学研究科 看護学専攻 |          |       |    |
|--------------|----------|-------|----|
| 入学定員         | 修士課程     | 16    |    |
|              | 博士課程     | 4     |    |
| 収容定員         | 修士課程 (A) | 32    |    |
|              | 博士課程 (B) | 12    |    |
| 在籍学生数        | 修士課程     | 一般    | 14 |
|              |          | 社会人   | 17 |
|              |          | 留学生   | 0  |
|              |          | その他   | 0  |
|              |          | 計 (C) | 31 |
|              | 博士課程     | 一般    | 0  |
|              |          | 社会人   | 10 |
|              |          | 留学生   | 0  |
|              |          | その他   | 0  |
|              |          | 計 (D) | 10 |
| C/A          |          | 0.97  |    |
| D/A          |          | 0.83  |    |

因みに、過去7年間の大学院修士課程（修士課程）74名、博士後期課程（博士課程）8名で、修了後の進路は、博士前期課程（修士課程）では教員39名（52.7%）、看護師・保健師・助産師20名（27.0%）、進学7名（9.5%）その他、研究機関の研究員、国家公務員、国会議員秘書、県看護協会教育担当者等多岐にわたり、この中には専門看護師のコースの修了生が4名も含まれています。また、博士後期課程（博士課程）では全員が教員（大学准教授、講師）です。

最後になりますが、「理念なき実践は盲目であり、実践なき理念は不毛である」の文言を銘肝に、本学大学院の教育理念・教育目標に相応しい学生を確保し、信州の看護保健医療福祉分野をリードするとともに世界に誇れる看護職の人材育成に努めてまいります。今後とも長野県民の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

（本学教員：健康・保健学講座教授・大学院入試部会長）

# 看護実践国際研究センター活動報告

〔異文化看護国際研究部門〕

## 中国医科大学交流会のご報告

飛弾浩一・喬炎

9月13日から19日までの日程で7名(うち1年生が6名、2年生が1名)の学生を引率し、喬教授と飛弾の2名で中国は瀋陽にある中国医科大学へ行ってきましたので報告いたします。前号の学報でも報告のありましたように、今年度の6月14日から6月17日の日程での前田先生、喬先生両名が中国医科大学を訪問し、本学と中国医科大学との間で学術、人材交流のあり方について模索してきています。また、7月には中国医科大学国際交流センターのセンター長である才越教授が本学に来学されるなど、中国医科大学との交流に関する話が着々と進んでいました。こうした一連の話し合いの結果、試験的に本学の学生有志を募って9月の中国医科大学訪問と相成った訳です。この企画当初は、このような突然の催しに参加してくれる学生は果たしているのだろうかかと危惧していましたが、なんと1年生からは石野君、伊藤さん、北澤君、熊谷さん、白武さん、山田さん、2年生からは宮澤さんの計7名もの希望者が名乗り出てくれました。



〔中国医科大学学長訪問(前列左から白武、宮澤、山田、熊谷、石野、後列左から伊藤、喬先生、趙学長、北澤、飛弾先生)〕

さて、肝心の交流会の内容ですが、一つは参加した学生達に解剖学や病理学を学んでもらいました。これらは、中国医科大学基礎医学院解剖学教室にてヒトの標本を用いて、解剖学演習を現地の先生方に日本語で指導していただいたり、様々なヒトの病理標本を用いて病気に関する説明をしていただいたりしました。本学では実際のヒトの解剖を経験したり、見学する機会を持つことが難しいことから、こうした経験は、学生にとって良い学習の機会になったのではないかと考えています。また、中国医科大学の医学部には、以前より日本語クラスが設けられており、日本語で医学の講義を行えるスタッフがいることから、日本人学生にとっても言葉の壁が低いのではないかと考えられます。そのため、こうした催しにも参加しやすく、実際の講義内容もより深く理解し易いのではないかと考えられます。また、以上のような講義の合間に中国医科大学内をいろいろ案内

していただき、中国における献体の状況や、学内で作成している解剖図説や、標本の現場なども見せていただきました。中国では日本ほど献体してくれる人が多くないそうで、貴重な人体標本を何年も授業で繰り返し使用するそうです。



〔解剖学の講義の様子〕

もう一つは、中国医科大学の第二付属病院産婦人科及び小児科の病棟を見学させていただき、日本語でいろいろ説明を受けることで中国における医療事情を学ばせてもらいました。看護という視点からは、国が違えども共通している事も多くありましたし、異なることもありました。日本の病院との違いで最も驚いた点は、病棟内が星によってクラス分けされており、星の数によって患者の費用負担は当然のこと、そこで働くスタッフの給与まで違う事でした。中国はつい最近まで「平等」が売りだったはずですが、わずかな期間の間に日本以上に資本主義的な考え方や制度が導入されており、大変なスピードで中国の社会が変化している様子が見て取れました。

また、中国医科大学看護学院の英語コースの学生や、医学部の日本語コースの学生との交流を行いました。これらの交流会には非常に多くの学生が参加してくれ、お土産に持参していた長野県看護大学のロゴ入りボールペンが全く足りないほどでした。英語コースの学生達とは筆談と慣れない英語でコミュニケーションを取っていましたが、この経験を通してコミュニケーションツールとしての語学の重要性を痛感したのではないのでしょうか。また日本語コースの学生達は日本語で意思疎通が十分にはかれるほどの語学力を有していましたし、どの学生もいろいろな事に対し良い意味で非常に食欲でした。彼らのそうした姿勢から、日本の学生達も何か感じる所があったのではないかと思います。

以上のような看護に関する勉強だけでなく、瀋陽故宮や清朝第2代皇帝皇太極の陵墓である北陵公園、2006年に開催された中国瀋陽世界園芸博覧会の会場跡を訪れ、中国の歴史的背景や文化についても触れる機会も得ました。こうした施設を訪れた際、喬教授の知人で日本語のできる中国医科大学生のシンシアさんや、八神君にガイドをお願いし、大変お世話になりました。

以上のような中国医科大学との交流会を通じて、これからの展望を以下に記します。瀋陽は、中部国際空港から瀋陽桃仙空港まで約4時間弱と、地理的に非常に近い所にあ

ることや、物価が比較的安いことから、往復の渡航費と1週間の滞在費をあわせて約10万円ほどと学生の費用負担も比較的安価ですみます。また、皆さんご存知のように中国の抱える人口は世界最大であり、今後も続くと思われ、高い経済成長から近い将来、国際社会における中国の存在感はますます大きなものになると予想されます。そのため、将来、海外で活動する上で、英語だけでなく中国語の重要性もますます高くなると考えられ、中国語などにいち早く触れる機会を持つことは学生にとっても有意義だと思われまます。また、今後もこのような交流会を実施する上での問題点としては、引率する教員に中国語の語学力が求められる点が挙げられます。大学内や、ホテルでは日本語や英語でコミュニケーションをとることが可能ですが、ひとたび、街中に出るとほとんどの人は中国語しか話せません。そのため、中国語に堪能な教員が最低1名は必要だと感じました。ただこの問題点は、日本語の話せる学生等にガイドのアルバイトをお願いするなどかなりの部分は解決可能だと思われまます。



〔中国医科大学看護学院の英語コースの学生との交流会の様子〕

中国医科大学でも今後、看護学部日本語クラスを開設する予定で日本の大学との提携を模索しているとの事であり、今回の本学学生の中国医科大学訪問を通じて、本学との間にお互いに有益なパートナーシップを築いていくことができれば良いと考えています。最後になりましたが、今回の訪問に際し、我々を暖かく迎え入れ、歓待してくれた中国医科大学学長の趙群教授、国際交流センターの才越教授、潘伯臣助教授、また、終始我々の通訳を務めて下さいました李勝軍講師に深くお礼申し上げて締めくくらせていただきます。

(本学教員・看護形態機能学講座助教、  
本学教員・看護形態機能学講座教授・異文化看護国際研究部門)

### …学報への投稿募集…

学報への原稿を募集します。内容は、

- 近況報告：学術・社会貢献のニュース、出版、学会活動、学会参加報告、Conference Report、etc.
- 自由投稿：書評、本の紹介、写真、ミニエッセイ、etc.
- お知らせ：勉強会、読書会、クラブ活動、サークル、etc.
- その他：お便り、お知らせ、お勤め本、etc. などです。

詳細は広報・交流委員会学報編集部へ。

## 教員活動報告

〔教員活動報告〕

### NHS TRUSTに見る QOLを追求した認知症ケア視察研修 in マンチェスターに参加して

楠本祐子

2007年4/28~5/5、イギリスの認知症ケア視察研修に参加してきました。認知症ケアでご活躍されている永田久美子先生(認知症介護研究・主任研究主幹)と行く、8日間の研修ツアー(通訳つき)でした。参加者は19名で、看護師、介護士、大学の研究者、医師、ケアマネージャー等々であり、年齢層も幅広く、中には親子で参加されている方もいらっしゃいました。

マンチェスターは、産業革命発祥の地です。歴史を感じさせる古くて立派な建物がきちんと管理され、ホテルや公共の建物として使用されていました。また、サッカーのクラブチームで有名なマンチェスター・ユナイテッド、マンチェスター・シティがある都市としても有名です(もちろん観戦することは出来ませんでした…)。

研修会場所は、マンチェスター郊外のストックポート地区にある、NHSの施設(名称Meadow)でした。研修プログラムには、認知症高齢者を取り巻く専門家や家族、ボランティアの方からの講義と、実際のケアを見学できる施設見学や訪問などから構成されていました。このMeadowに勤務するST(言語聴覚士)であるジャッキー・キンデル先生が中心となり、綿密に研修準備をして下さったそうです。キンデル先生は出産予定日まで2週間という時期にも関わらず、細やかな配慮で私たちをもてなして下さいました。そして、どの施設へ行ってもスタッフから温かい歓迎を受けました。その分スケジュールは過密で、朝7時半にホテルを出て、電車とバスを乗り継ぎ、研修を受け、夕食会などを済ませ夜9時にホテルに戻るという超多忙な日々でしたが、充実していました。

まずは、NHSの管理者から、認知症ケアを取り巻く医療制度についての講義がありました。イギリスにはNHS(National Health Service)という、国営医療制度があり、16歳以上の国民が保険料を支払い、無料で医療を受けられる仕組みになっています。TRUSTとは、そのNHSで受けられるサービスの内容(救急搬送、急性期、慢性期、初期医療、精神保健)です。この制度により、医療は無料で受けられますが、日本のように自由に大きな病院の診察を受けることができません。GP(General Practitioner)、いわゆるかかりつけ医が登録制となっており(現在は選択可)、何かあればまずGPが診察をし、必要と判断した場合にのみ専門病院にかかることができます。一見、不自由を感じますが、幼少の頃から成人まで同じGPが継続して診察するため、病気の発見も早いそうです。

## 研修プログラム

〈1日目：4/30〉 講義

### 【組織の概要】

- 9:30 地域・国からの保健(NHS)
- 10:45 ソーシャル・サービス部門
- 11:45 ボランティア部門
- 12:30 昼食(サンドイッチ)

### 【英国における認知症の診断】

- 13:30 初期評価
- 14:30 神経心理学
- 15:45 「人間中心のケア」についてのGワーク
- 17:00 終了
- 夜 夕食ミーティング(イタリア料理)

〈2日目：5/1〉 サービス見学

### 【講義・施設見学】

- 9:00 高齢者精神保健サービス
- 10:00 施設訪問 訪問看護
- 12:00 昼食(サンドイッチ)
- 13:00 施設訪問 長期介護施設、デイホスピタル
- 16:00~17:00 意見交換
- 17:00~ 夕食ミーティング(トルコ料理)

〈3日目：5/2〉 サービス見学

### 【講義・見学】

- 9:00 家族介護者の視点
- 10:00 施設訪問 SONASセラピーグループ
- 12:00 昼食(サンドイッチ)
- 13:00 施設訪問 デイサービス
- 16:00~17:00 意見交換
- 17:00 フィッシュ&チップス
- 18:00 講義:前頭側頭認知症の日本と世界における研究の動向

〈4日目：5/3〉 講義

### 【病気後期のケア】

- 9:00 食事と嚥下
- 9:45 認知症プロジェクトにおける末期の緩和ケア
- 11:15 認知症の若者のケア
- 12:00 昼食(サンドイッチ)
- 13:00 認知症患者と家族のサポートグループ
- 14:00 介護者のための勉強会
- 15:00 質疑応答
- 16:00 ティータイム

また、無料で提供されているサービスの経費節減についての講義がありました。NHS全体の予算は年間920億ポンド(約20兆円)で、老人保健サービスには1億1千万ポンド(約250億円)組まれています。その中で、認知症対策予算は年々増加の一途をたどり、重要な位置を占めています。主な対策としては、スタッフ教育(意欲がある質の高いスタッフを育てる)、無資格者の活用(資格を持ってい

る専門職が無資格者をスーパービジョンしていく)、外注を増やす、ボランティアの活用などがあります。イギリスではボランティア団体が多数あり、日本に比べて幅広い活動を行っています。その収入源は、市、病院、宝くじ、また高齢者専門の生命保険などの事業を運営されているそうです。活動内容は、本人への支援(退院後の生活をチェックし、必要な生活へのサポート、事故予防の視点、外出のサポート、社会参加の支援など)、介護者への支援などがあります。そして大事なのは、社会に対して高齢者の声を代弁していくという役割を持っていることです。在宅復帰への支援にボランティアが重要な役割を担っていると感じました。このような質の高いボランティアになるためには、選定基準をクリアし、トレーニングコースを受ける必要があるそうです。これほどボランティアの方達が活躍しているのだから、専門家の私たちも頑張らねばならぬと身が引き締まる一方、国が補いきれない部分をボランティア団体がカバーしているということでもあり、やはり医療や高齢者対策は全世界共通の課題であるのでしょうか。

専門医からは、認知症の診断についての講義がありました。専門医はGPから依頼を受けて診察を行います。病院ではなく自宅に訪問をし、初期診断をするのが日本とは異なる点です。1~2時間かけて病気の経緯や歴史(家族からの情報を中心に)、自宅の環境、本人がどれくらいの対処能力を保持しているかを中心に観察し、認知テストをします。専門医はその結果をみるだけでなく、答え方の印象をみることで、難しい認知症のアセスメントを行っています。慣れた場所での診断は、生活の様子を知れることや、余計な緊張をすることなく本人の保持している機能のアセスメントをすることが出来るなどのメリットがあると思いました。そして、初期診断にあたってはCTやMRIなどの検査は行われず、次の精査が必要と判断された段階にのみ行われるそうです。このように、専門医からの早期の診断により、医療費の節約や、多くの医療機関をまわることなくサービスを受けられるようになり、本人・家族にとって負担軽減につながります。

2日目からは施設見学をして、施設を利用している方々と触れあうことが出来ました。まず訪問看護師と共に、在宅で暮らす認知症高齢者のお宅に同行訪問しました。このお宅は娘さんが同居し、介護を行っていました。看護師は、生活の様子や困っていること、介護者である娘さんの気持ちなどを聞いていました。高齢の女性は、きちんとスカートとブラウスを身につけ、ソファにゆったりと座って、初めて見る日本人の訪問にも笑顔で迎えて下さいました。

他の研修メンバーが同行したお宅は、認知症で一人暮らしをしている女性(かなり進行している)で、同じく歓迎を受けたそうです。イギリスでは、一人暮らしをしている認知症高齢者も多くいるとのこと。なぜそれが可能かとスタッフに何うと、「その方が一番安心して落ち着いて暮らせる場所だから」という答えが返ってきました。もちろん、一人暮らしのためのサポートは不可欠で、様々な訪

問や安全のためのサービスが提供されています。認知症を持つ方にも、出来る限りその方らしい生活を支えていくことの大切さを改めて感じました。

午後は、デイホスピタル（日本のデイケアのように通所して日中サービスを受ける）を見学しました。レクリエーションや昼食の楽しみの他、入院が難しい認知症高齢者の検査やアセスメントなどがなされるそうです。そこに通所している高齢者の方々に片言ながら挨拶を交わしていると、背広を着た英国紳士が手招きして下さり、私に何かを伝えようとしてくれました。認知症高齢者とのコミュニケーションは難しいことがありますが、相手の方のバックグラウンドも知らないことや言葉の問題も加わり、その困難さは冷や汗ものでした。



〔デイホスピタルのホール〕

しかし、そこは同じ人間同士と腹をくくり、焦りながらもしっかり目と目を合わせ、相手が何を伝えようとしているのか考えながら向き合いました。その英国紳士は、背広の内ポケットから手帳を出して、古い写真を大切にを見せてくれました。それは、日本の温泉地の写真で、下に小さく漢字が書いてありました（古ぼけて読めず）。私たちのことを日本人だと理解する力をお持ちで、大事な写真を見せて下さったのだと思います。その写真にどのようなエピソードがあったのかを知りたかったのですが、解ることが出来ずに残念です。その後、英国紳士のリードのもとダンスを踊りました。私はダンスの経験もなく、まったく解らなかったのですが、英国紳士の素敵なリードのおかげで、楽しむことができました。あとで聞くとその方は、かつてダンスの先生をしていたそうです。私を生徒兼パートナーに選んでいただいたことにちよっぴり鼻を高くしながら、



〔SONASに参加されたジェニーさんとOTさん(掲載許可済)〕

やはりその方の長年培ってきた力は残されるのだなあと改めて感心しました。そして、多くの高齢者が身綺麗な仕度を整えており（日本の高齢者が身綺麗でないという訳ではないですが）、その方が自分らしくあるためにも大事なことのように感じました。

3日目は、施設内で毎日行われているSONASという五感を刺激するセラピーに参加しました。この日は6名の高齢者とOTが参加していました。SONASは、誰でも出来るようにCDにプログラムされており、OTの声かけのもと歌を歌ったり、ことわざで頭を働かせたり、アロマの香りをかいだり、甘いものを食べたり（この日はチョコとバナナ）などの45分間の楽しいプログラムでした。

他にもたくさんの講義や見学、招待に参加させていただき、伝えきれない位のたくさんのことを学ばせていただきました。ハードスケジュールでイギリスの美しい街並みを堪能する時間も少なかったのですが、スタッフの方々が、手作りのスコーンやケーキ、フィッシュアンドチップス(サブライズでした)などでもてなして下さい、イギリスの食文化にも触れることが出来ました。とってもおいしかったです。

この研修を通して、認知症高齢者のQOLを大事にしていくとは、やはりその人らしく生活出来るように支えていくことであると改めて感じました。もう1つの財産は、参加メンバーとの出会いから、職種を超えたネットワークを広げることが出来たことです。



〔参加メンバー(後列左から2人目:永田先生、右端:ジャッキー先生、前列左端:楠本)〕

このような研修の機会をいただいたことに改めて感謝し、次回はゆっくりイギリスに行ってみたいという思いと共に締めくくりとさせていただきます。

〔本学教員・老年看護学講座助教〕

〔教員活動報告〕

## Helsinki大学(フィンランド)での 言語学史学会に参加して

江藤裕之

言語学史の学会は現在ヨーロッパとアメリカを中心に世界に7つほどある。そのうち、筆者がかかわっているのは、言葉の通じる英語圏とドイツの学会である。その中で、今年にはイギリスのHenry Sweet Society（注 Henry Sweet は19世紀後半から20世紀初頭のイギリスを代表する英語学者）とドイツに本部があるSGdS (Studienkreis, Geschichte der Sprachwissenschaft [言語学史学会]) が共同で学会を開催した。ホスト校はフィンランドのヘルシンキ大学である。

ヘルシンキは本学的那須裕教授もかつて研究滞在された所であり、出発前に那須教授からとても羨ましがられた。

筆者も、以前2度ほど訪れたことはあったものの通過したに過ぎず、今回はじっくりと滞在できるので楽しみであった。また、出発が7月17日だったので日も長く、暗く憂鬱な冬に比べ快適な毎日であった。



〔ヘルシンキの中心「元老院広場」から見た大学本部（右）〕

ムーミンとオーロラとサウナで有名なフィンランドは自然の美しい国である。北欧では珍しくユーロが通貨となっており、歴史的な背景から隣国との関係には敏感である。言葉は、隣国のスウェーデンやノルウェーがゲルマン系の語であるのに対し、フィンランド語はアルタイ系であり、系統がまったく異なる。人口は500万人と神奈川県よりも少なく、また、スウェーデン語を話す地域もあるらしいので、フィンランドを母語とする人々の数は意外に少ない。なお、フィンランドでは、フィンランド語とスウェーデン語が併記される二重言語政策を取っている。英語はかなり通じる。

夏は気持ちよい日々が続くが、冬は暗く寒く、人々の心は憂鬱になり、そのせいかうつ病や自殺が社会問題となっている。また、飲酒（特に若者の飲酒）が問題となっており、これは、ヨーロッパ全体にも言えることなのだが、寒い冬を乗り切るには酒でも飲まないと言われてはならないのだろうか。酒税をはじめ税金が高いことは有名であるが、そのため国際航路の船は酒を飲むため（免税となるので）にあるとさえ言われている。筆者も、帰国前の短い時間を利用してエストニアのタリン（ハンザ都市）を船で訪問したが、90分ほどの快適な船旅の途中、たしかに多くの人が船内の免税店でこたまアルコールを買い占めていた。

今回の合同学会はヨーロッパを中心とした国際的な学術集会であり、参加者も開催国のフィンランドのみならず、イギリス、ドイツ、フランス、オランダ、スウェーデン、ベルギー、グルジア、ポーランド、エストニアなどさまざまな国から学者が集った。今年の総合テーマはSprachlehre und Sprachpflege（言語教育と言語ケア）である。参加者の総計60名ほどの比較的小規模の学会であり、アジアからの参加は筆者一人であった。発表題目は、Language Study as National Learning: Motoori Norinaga's (1730 - 1801) *Ui-yama-bumi* (The First Mountain Climbing) (ナショナル・スタディー [国学] としての言語研究: 本居宣長の『うひ山ぶみ』について) というもので、日本の国学研究の代表者である本居宣長の『うひ山ぶみ』に記した学問観をドイツのフィロロギーの学問観と比

較したものである。漢学や洋学に「侵される」前の純粋な日本人の心を研究し、やまと心に帰ることを主張するために、古代の日本人が残した文献の研究、そのための第一歩としての言語研究を極めた宣長の態度は、まさに19世紀のドイツ文献学者の態度と同じであるという趣旨の発表である。

筆者の専門は19世紀ドイツを中心とする近代言語学発生期の学問史であるが、それは、社会学、心理学、言語学といった新興の学問分野が、自然科学の成果を真似て何とか「学問」として自立しようとした時期でもあった。そして、学者たちはそれぞれの分野で客観性や実証性という点について議論し、方法論争 (Methodenstreit) を闘わせた時代であった。学問とは、すなわち方法論という雰囲気さえあった。その意味で、今日の看護学者たちが懸命に取り組む姿に似ている。

ヨーロッパの学者の学会なので、学会での公用語は英語、ドイツ語、フランス語である。フィンランドでは、ドイツ語の学習熱も高いようで、今回はドイツ語もよく耳にした（フィンランド語はさっぱりで、「キートス」(ありがとう)しか知らない）。しかし、昨今の国際共通語としての英語の力はすさまじく、全員への挨拶やお知らせなどは英語のみか、英語とドイツ語で行われる。英語の力長るべしである。



〔フィンランド遠景：中央がヘルシンキ大聖堂〕

それほど大きくない集まりなので、集った者どうしの親睦も深めやすいが、プログラムをサボることは難しい（すぐに目立ってしまうため）。また、発表の時間が一人45分（発表30分、質疑応答15分）と長く、発表は準備できるが、やはり外国語での質疑は疲れる。ただ、今回は、発表が初日の午前のセッションの2番目だったので、早く自分の義務を終え、すぐに気が楽になった。これが、最終日だと学会の期間中なかなか落ち着けないこともある。おまけに、頻繁にコーヒブレイクがあるので、ひたすら誰かと話していることになる。しかし、そういった「話す」ことから、新しい共同研究計画や研究滞在の話しがまとまることもある。前にも述べたが、国際交流は友情が基本である。

（本学教員・外国語講座准教授）

#### 〔教員活動報告〕

### 思春期ピアカウンセラー養成講座の報告

林 陽子

近年、思春期の性行動の活発化、性感染症の増加などが社会的に問題視されています。長野県では、平成15年から「すこやか親子21」の第1課題である「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」の一環として「思春期ピアカウンセラー・

システムづくり事業」に取り組んでいます。そこで、昨年度に引き続き、伊那保健所と長野県看護大学の共催で平成19年8月6日～9日にかけて、ピアカウンセラー養成講座（前期コース）が本学を会場に開催されました。受講者の中心は本学の学生であり、長野県内の看護学生計37名が真夏のキャンパスに集まり、学年、学校を超えた交わりの中でそれぞれの学びがあったようです。



〔ディスカッションの様子〕

「ピア」とは、同当者：同僚：仲間であり、「ピアカウンセリング」とは、人間の成長と心の健康に関する知識とともに、積極的傾聴と問題解決スキルを用いて、年齢、社会的地位、抱えている問題などにおいて立場が同様である人々に、ピア（仲間）の意識を持って行う相談活動のことです。思春期世代は身近で最も信頼できる相談相手として、同年代の「仲間」を選んでいきます。仲間を通じ同世代の若者が正しい知識のもと、生き方や性に関わる態度や行動を意思決定する能力を高めることを支援できるようにスキルを身につけ、さらに学んだことを活かして思春期ピアカウンセリング活動を実践できるようになることがこの講座の目的です。

養成講座4日間で学ぶ内容は、①ピアカウンセリングに関する知識、②セクシュアリティに関する知識、③ピアカウンセリングの実践、の3つに大別されます。カウンセリングや性に関する講義を通して必要な知識を身につけ、グループでのディスカッションやグループワークを通して他者とのかかわり方を学習していきます。初日こそ緊張感が漂っていましたが先輩ピアのリードもあり、徐々にお互いが打ち解け、笑い声に包まれながらいい雰囲気ですディスカッションやグループワークを行っていました。



〔4年生が担当したセクシュアリティの講義の様子〕

今年度は、昨年度に本学で開催された講座修了生が、先輩ピアとして参加し講座運営に加わり、支えてくれたことが大きな特徴です。まず、連日奮闘してくれたのが、本学で

サークル活動をしている2年生の「Happeer ☆」でした。講師と連携をとり、プログラム中のエクササイズ（アイスブレイクなど）の全てを担当し、自分たちの知識や経験を活かして講義の中にも度々登場し大活躍してくれました。また、4年生の先輩ピア有志が就職活動などで忙しい中、妊娠、出産、避妊、コンドームネゴシエイトという講義の部分を担当してくれました。「さすが実習を終えた4年生は違うな」という貫禄を感じました。「先輩ピアの様子をみていると、経験をたくさんすることでスキルを磨いていると思った」「『Happeer ☆』の方の説明がとても上手く、わかりやすくて、どんどん興味がわいた」などが受講生の感想文にありました。講座での先輩ピアの存在がまさに『ピアエデュケーション』であると感じ取ったのではないのでしょうか。

最終日には4日間の集大成として、グループ毎に自分たちの伝えたいことを企画し発表する「ミニピアカウンセリング講座」を行いました。全てのグループが対象を高校生に設定し、「ちゃんと知ってる？性のこと」「自分を大切にしていますか？」「大切な私とあなた」などをテーマにピアカウンセリングを実践しました。内容はバラエティーに富んでいましたが、どの企画にもピアカウンセリングの大切なメッセージである「自分を大切に、相手を大切に」が含まれており、3日間で学んだ内容をしっかりと受け止めていることが伝わってくる発表でした。



〔4日間大活躍の「Happeer ☆」のみなさん〕

受講後の感想には、「学年、学校を超えていろいろな人と知り合えて良かった」「勉強になった」といった内容が多くありました。今まで話したことがない仲間と生や性について真剣に考え、語り合い、カウンセリングの技術について学ぶことができるこの講座は、医療関係者を目指す学生にとって貴重な時間になったようです。また、「新たな自分の発見になった」「性に対するイメージも肯定的なものに変えることができた」「自分の成長につながった」「自分のこと、自分の性を好きになった」などの内容もあり、この講座を受けたことによって、受講者自身の自己肯定感が高まっていることにも大きな意味があると感じました。そして、「4日間で学んだことを生かして活動してみたい」といった心強い感想も沢山あり、今後ますますピアカウンセリング活動の輪が広がっていくことが期待できます。来年度も多くの学生の皆さんが参加されることを願っています。

（本学教員・母性看護学講座助手）

# 教育実践活動報告

## 平成19年度サモア国立大学－長野県看護大学 学生交換留学事業と看護実習の報告

### 学生交換留学事業と看護実習の概要

田代麻里江

本事業として、サモア国立大学看護学部から留学生を受け入れるのは、今年で2回目でした。今年度のサモアからの留学生は、セイプア・ツツウィラさん（学部3年生）、ペテリ・ソロさん（学部2年生）でした。今年度も、事業の中心的プログラムは、サモア人留学生と本学の学生が共に国際看護学の実習を体験することでした。サモア人留学生とともに実習に取り組んだのは、本学4年生の希望者の中から、英語力と動機の高さなどにより実習の履修が認められた4人で、荻原彩さん、熊谷亜由美さん、澤田いずみさん、藤田朋香さんでした。留学生との合同実習に備え、4人は、平成19年2月に選抜されてから、6ヶ月に渡り英会話の特訓と、サモア文化等の学習に取り組んできました。

看護実習では、サモア人留学生1人と、2人の本学学生が一つのチームとなり、それぞれのチームが、実習現場である介護老人保健施設で、1人の入所者の方を担当させて頂きました。ご紹介頂いた入所者の方は、いずれも日常生活は自立しておられました。その為、実習では、看護実践の中でも、対象の方を理解する「情報収集とアセスメント」に焦点をあてて行いました。国際看護学（異文化看護学）という観点から、入所者の方にお話しを伺いながら、その方を文化的にアセスメントすることが実習の目的でした。

学生たちは、看護師が自分と異なる文化背景のクライアントを担当した際に用いる、「トランスカルチュラル・アセスメント・モデル」を用いて、サモア人の視点から、日本人の高齢者である入所者の文化的な特徴と、その特徴が健康に与える影響について、インタビューや観察によって情報を収集し分析を行いました。

サモア人留学生たちは、実習を通して、日本の高齢者にとって、入浴が生活の中でいかに重要な位置を占めているかという日本文化と健康行動の特徴を知りました。更に、日本の家族規模が縮小し高齢者の在宅介護が難しくなっていること、家族が高齢者の介護よりも個人の自己実現を大切にしている価値観が変わりつつあるという、日本文化の変化と高齢者介護の課題も学びました。サモアでは高齢者は各家庭で手厚く介護を受けています。それは、自分の両親を最後まで看取ることによって、自分たちが神からの祝福を受けるといった信念が広く受け入れられているからだといいです。しかし、日本の変化を目の当たりにして、20年、50年後のサモアでは、日本社会に起こったような家族構成や

価値観の変化によって、高齢者の入所施設が必用になる時がくるかもしれないことも予感したようでした。

実習中に行った学内カンファレンスでは、まず「学生交換留学事業の学生にとっての到達目標」を学生たちで話し合いました。英語による学生間のディスカッションから、目標は、文化の違いを乗り越え、互いを尊重し、互いから学びあうこと、そして共に学ぶことでより深い異文化看護の理解に到達することとなりました。

さらに、カンファレンスの時間には、異文化理解の基本的概念、および、カルチャーショックの構造と症状について、担当教員が講義を提供しました。交流事業が始まって数日後、サモア人留学生も本学学生もカルチャーショックの真っ只中にいました。本学学生たちにとっては、ホストとして、異文化背景を持つサモア人留学生を受け入れ気遣うストレス、そして実習やディスカッションをすべて英語で行うストレスへの対処が課題でした。また、サモア人留学生にとっては、英語が通じず、家族や同国の友だちのいない環境でホームシックに陥り気持ちの浮き沈みとの戦いが大きな課題であったようでした。しかし、講義でカルチャーショックの構造を理解することで、両者とも精神的な疲れや苛立ちを客観的に捉えることができたようでした。

カルチャー・ショックの渦中にある間は両者ともに辛い思いをしたことと思いますが、学生たちには、この貴重な体験を、将来看護専門職としてのキャリアに生かしてほしいと心から願います。



〔学長主催の夕食会にて〕

ところで、サモア人留学生のセイプアさんとペテリさんは、音楽と踊りのすばらしい才能をもっていました。実習現場となった介護老人保健施設等では、歌と踊りで、利用者の方々との交流を楽しみました。2人は熱心なキリスト教徒でもあり、学内の交流会等でも、ギターやピアノに合わせて沢山のゴスペルソングを歌ってくれました。2人が豊かな才能を惜しみなく私たちにシェアし、本学に神の祝福を運んでくれたことを心から感謝しています。

最後になりましたが、本事業のために、深いご理解とご協力を賜りました学内外の皆さまに、心からの感謝を申し上げます。

（本学教員・国際看護学講座専任講師・学生交換留学看護実習担当）

2007 サモア国立大学ー長野県看護大学  
学生交換留学看護実習 スケジュール

|          |   |
|----------|---|
| 8月23日(木) | 留学生到着&お迎え (成田国際空港)  |
| 24日(金)   | 東京スタディー・ツアー<br>(聖路加国際病院、東京大学、浅草寺)                         |
| 25日(土)   | 休 息   |
| 26日(日)   | 日曜礼拝(駒ヶ根アルプスシオン教会)<br>ウエルカム・パーティー(実習生&サモア<br>交換留学OB/OG主催) |
| 27日(月)   | 実習オリエンテーション<br>ウエルカム・ランチ (有志教員主催)                         |
| 28日(火)   | 看護実習(介護老人保健施設 プラムの里)<br>実習カンファレンス(学内)                     |
| 29日(水)   | 看護実習(介護老人保健施設 プラムの里)<br>実習カンファレンス(学内)                     |
| 30日(木)   | 看護実習(介護老人保健施設 プラムの里)<br>実習カンファレンス(学内)                     |
| 31日(金)   | 看護実習(小規模多機能型居宅介護施設<br>こまちの家) 実習カンファレンス(学内)                |
| 9月1日(土)  | 駒ヶ岳ハイキング  |
| 2日(日)    | 日曜礼拝(駒ヶ根アルプスシオン教会)  |
| 3日(月)    | 留学生によるサモア国立大学についての<br>プレゼンテーション&ディスカッション<br>(在校生対象)       |
| 4日(火)    | 報告会発表準備 夕食会(学長主催)   |
| 5日(水)    | 報告会発表準備<br>留学生 授業参観(成人看護学方法 蘇生法)                          |
| 6日(木)    | 実習成果報告会<br>フェアウェルパーティー(大学主催)                              |
| 7日(金)    | 留学生帰国&お見送り(成田国際空港)  |

**My Gratitude for the Student Exchange Program  
学生交換留学プログラムに対する感謝**

セイプア・ツツウィラ

It is an honor and great pleasure for me to say a few words of thanksgiving about the exchange program for the students. It was a great program which benefits students for their preparation on their future career. I thank those who are dealing with the program in Nagano College of Nursing, Marie Tashiro, President Miyama and staff as well as the whole ladies and gentlemen of the NCN. I have gained

a lot from this exchange program in practicum area and how to deal with different circumstances.

In this program, I have experienced a lot of changes in lifestyle especially the traditional way of living. I have come across culture shock while living in Japan, and fortunately I have recovered on the last day of the program wishing and hoping that could be the second day of the exchange program. Transcultural in Nursing was the most essential knowledge dimensions in this student exchange by focusing on the holistic culture care (caring).

Experiencing the different culture was one of the most essential thing to look at the differences and respect without denying or disrespectful. Even though it was hard to adapt to a new culture, but experiences were a lot more important.

And if I integrated that in to practicum field, I would like to say, respecting and discipline oneself to the different culture in order to provide caring was very important to offer caring for the sake of the client. And at the same time, clients/patients right are more important than anyone. He/ She will make their own decision on whatever they have agreed on.

Last but not the least, I would like to thank to my Faculty or Department of Nursing in Samoa, also to the Dean of the Faculty Fulisia Aiavao & staff of NUS, Nursing Students both ladies and gentlemen of NUS for sending us Seipua Tutuila & Peteli Solo to this Exchange Program. I thank very much to the NCN school for accepting us as one of the students in NCN during two weeks of the program. We have nothing to worry about during our program. You were always there and help us throughout the whole program without letting us stay by ourselves and keep us in our room wondering. A big thanks to the four Girls and Marie, those who deals with us during the whole time since we arrived until we depart Narita airport at Tokyo.

May God fulfil all your dreams and be with you wherever you go.

I love you all. Thank you

**【要約】**

私はここに、学生交換留学プログラムに対する感謝を述べさせて頂くことを光栄に思っております。このプログラムは、私たち学生の将来のキャリア形成のために大変有意義なものでした。プログラム実現のために労して下さい、長野県看護大学の田代麻里江氏、深山学長そして他の教職

員の皆様に感謝致します。私はプログラムの中の看護実習と、異なる状況下で生じる様々な問題への取り組みについて多くを学びました。

このプログラムで、私はサモアと日本の生活様式の違いを学びました。また日本滞在中カルチャー・ショックを体験しましたが、プログラムの最後の日には回復し、「ああ、これがプログラムの2日目だったらどんなに良いだろう」と思いました。異文化看護学の学び～それは対象者の持つ文化を全人的に捉えること～は、プログラムの中で得た特に重要な知識でした。



【介護老人保健施設「プラムの里」にて  
利用者の方々と大笑い！セイブアさん】

私は、このプログラムで、異なる文化を体験すること、そして違いを否定せず尊敬することの重要性を学びました。実際、新しい文化に適応することは難しいことですが、それを体験できたことがすばらしい経験でした。そして、この体験を看護実践現場に適応するならば、看護ケアを提供するために、私自身がクライアントの異なる新しい文化に適応することは、クライアントの利益のために大変重要であるということでした。同時に、クライアントが自己決定するという権利は何にも増して大切でしょう。

最後になりましたが、私は、サモア国立大学看護学部、フリア学部長と先生方、そして学生の皆さんが、私たち、セイブア・ツツウィラとペテリ・ソロ、をこのプログラムに送り出して下さったことに心から感謝致します。

私は長野県看護大学に貴大学の学生として2週間受け入れて下さったことに心から感謝しております。この2週間、私たちは生活面で何も心配することがありませんでした。皆さんは、いつも助けの手を伸べて下さり、私を1人で放っておくことなく、私たちの部屋で一緒に過ごして下さいました。特に、私たちが成田に到着して、また出発するまでの間ずっと、私たちのお世話を下さった4人の学生の皆さんと田代先生に大きな感謝を表したいと思います。

神さまが皆さんが行かれるところどこにおいても、皆さんとともにおられ、皆さんのすべての希望を満たして下さいますように。

愛と感謝をこめて。

(サモア国立大学看護学部3年生)

## My Experience in a New Environment of Japan

### 新しい環境・日本における私の体験

ペテリ・ソロ

God has an incredible plan for our life; He works through our thoughts, our interests, our life and our gifts. I don't know why God send me to Japan. But according to the Bible, it says, He can show all of his wonderful things in life of those who believes in Him and things that they never seen before.

In my life history, I do not forget Japan throughout my whole life. In fact, there were a lot of new experiences that exactly reveals joy continually in me, because of the culture, lifestyle, and values that guide me throughout my journey in Japan.

In fact, Japan is a very nice country, respectful people, nice cultural ways, lifestyles, and etc..

Moreover, I was learning a good experience in Japan which is the TIME, I should always exist on the time, and has to be on time in everything at school, works and so forth...

I feel that Nagano College of Nursing successes to promote students' careers and talents in different areas like music, sports, especially the nursing that creates students life successfully.

I love Japanese elderly, because they expected me during practicum in the village of Plum, and the House of Komachi. I always admired them because they really active to do their own things that promote and maintain their health.

I love my Japanese friends, because we eat and sleep together. I was treating them same as I do with my Samoan friends.

All in all, I really like Japan and its environment. For all of my friends and teachers in NCN, I thank for your kindness and your support that makes me enjoy the life in Japan.

God Bless U all

Soifua ma ia Manuia

(Goodbye and you may be Blessed)

#### 【要約】

神は私たちの人生に大いなる計画を持っておられます。神は私たちの思いや関心そして人生や賜物を通して働かれます。私には、なぜ神が私を日本に送られたのかわかりません。けれど、聖書の中には、神はすばらしいものを、神を信じる者たちの人生にあらわして下さる。そして、それはまだ見たことのないようなものである、と記されてい

ます。

日本滞在中に私が得た沢山の新しい経験～文化、生活様式、価値観の違い～は、私の人生の中で忘れることの出来ないものとなりました。日本はとてもすてきな国です。尊敬すべき人々、魅力的な文化様式、生活スタイルなど。中でも、私は日本でよい学習をしました。それは「時間」についてです。日本では常に時間通りに約束の場所にいなければなりません。学校における行事や、仕事などもすべて時間通りでなければならないのですね。

長野県看護大学については、学生の様々な才能や将来性、たとえば音楽やスポーツを伸ばすことに成功していると感じました。



〔介護老人保健施設「プラムの里」にて  
利用者の方々にサモアの位置を地図で紹介 ペテリさん〕

私は日本の高齢者の方々を愛しています。実習先のプラムの里やこまちの家では、私のことを心待ちにしてくださいました。また、彼らを尊敬しています。なぜなら彼らは、自身の健康を維持向上するために本当に活発に行動しているからです。私は日本の友だちも愛しています。私たちは寝食を共にできたからです。私は日本の友だちをサモアの友人のように思って接しました。

何よりも、私は日本とその環境がとても好きです。

長野県看護大学の友だちと先生方、皆さまのご親切と助けによって私は日本での生活を心から楽しむことができました。本当にありがとうございました。

皆さまに神の祝福がありますように。

(サモア国立大学看護学部2年生)

## カルチャー・ショックを体験して

荻原 彩

約2週間、実習でも日常生活でもサモアの学生と一緒に過ごしてきました。その中で、文化が違うということからお互いにカルチャー・ショックに苦しみ、苦労した面も多々ありましたが、学んだこともたくさんありました。

まず、カルチャー・ショックですが、以前授業で学んで

いたため、多少の覚悟はしていましたが、思っていた以上につらく、大変なものでした。しかし、今回そのことを実際に体験することができ、本当によかったと今では思っています。なぜなら、実際に体験することで、今後また異文化と接する機会があったときにどう対応すればいいのかを学ぶことができたからです。

今回の体験から、カルチャー・ショックを解決するにはやはり相手と正面からぶつかって話し合うことが一番だということを実感することができました。また、ただ自分の意見を相手に伝えるだけではなく、相手の意見や文化も尊重し、理解する気持ちで話し合わなければ解決にはならないこともわかりました。

今回は、私の語学力も十分でなく、異文化という今までにない状況にさらされて、ショックが大きく、すぐにそれが異文化によるものだと気づくことができませんでした。また、自分の意見や気持ちを相手にはっきり伝えるということ自体難しいものであり、起こった問題をすべて解決することはできませんでした。しかし、これらの体験から学んだことを活かし、自分の将来に役立たせていきたいと思っています。



〔小規模多機能型居宅介護施設「こまちの家」にて 左から2人目：荻原〕

実習中の異文化看護についての話し合いからは、日本とは違った考え方があるということだけでなく、文化が違っていても、共通の考え方があることも知ることができました。また、異文化に触れることで、日本の文化について改めて考えさせられ、新たな発見をする機会にもなりました。このように、違った文化を知ること、自分の文化を改めて知ること、とても楽しく、すごく貴重な体験をすることができたと思っています。

また日常生活においても、ダンスや歌を教えてもらったり、サモアの料理を教えてもらったり、一緒に花火をしたり、冗談を言い合ったりして、とても楽しい時間を過ごすことができました。セイブアとペテリの2人にはとても感謝していますし、この実習を選択してほんとうによかったと思っています。

(本学学部4年生)

## 言葉というツール

### ～サモア人留学生と過ごした16日間から～

熊谷亜由美

今回、私は海外からの留学生、セイプアとペテリを迎えて、共に学ぶという貴重な体験をさせていただきました。

その中でひとつ、言葉について感じたことがあります。まず、日本人の母国語は日本語、サモア人はサモア語です。互いに相手の言葉を理解することができないので、私達は英語でコミュニケーションをとっていました。慣れない英語でのコミュニケーションはやはり疲れるものでした。全員にとってフラストレーションを募らせるものだったのです。サモア語だったら、日本語だったら、もっと違う言い方をするのに、もっと伝えられるのに…という思いを全員が持っていたと思います。それでも私たち日本学生は周りに日本語があふれた生活をしていましたから、サモア人留学生たちはもっと大変だったと思います。サモアでは授業や教科書で英語が使われています。私たちよりはるかに英語に慣れている彼らにとって、私たちの拙い英語はさらにストレスを強めるものになったと思います。

そして、ストレスと気持ちのすれ違いを生む原因の一つに英単語の解釈の違いがありました。語彙不足なのはもちろんですが、個人の考え方、受け取り方の違いを感じました。

一つの単語を使っても、その単語からイメージされるものは人によって違います。言いたいことを伝えたと

思っても、相手はどう受け取ったかは別だということを忘れてはいけません。伝わったろう、わかってくれるだろうではだめなのです。気づかないところで考えがすれ違っていることもあります。単語一つに頼りすぎず、伝えたい気持ち、意見をしっかりと持って時間がかかったとしても伝えることが大切だと思いました。



〔聖路加国際病院にて  
右から2人目：熊谷〕

また、この16日間全体を通して、サモア人と日本人のそれぞれが気になる点、傷つく点が違うと思いました。それぞれ気づかないうちに自文化にとらわれていると感じました。それはなかなか破れない、染みついているものであり、それが文化なのだと感じました。そして、個人のユニークさが文化によるものか個人によるものか、個性を文化と決めつけず、文化を個性と決めつけないで、文化としてとらえること、個性として理解することをしないと

感じました。

セイプアとペテリの二人と過ごした日々は、一緒に歌ったり、ダンスをしたり、ディスカッションをしたり、とても楽しいものだったのと同時に、様々な葛藤があったり、多くのことを考えさせてくれるものでした。様々な視点から物事を見ること、人との関わり方、他者を迎え入れること、自分と向き合うこと等、今回経験したことを忘れずに今後活かしていきたいです。ありがとうございました。

(本学学部4年生)

## カルチャー・ショックから学んだ アサーティブコミュニケーション

澤田いずみ

2007年8月末にサモア国立大学から2名の看護学生が本学に訪れました。私たち4年生の4名は国際看護学を学ぶ実践の場として、留学生のセイプアとペテリと共に約2週間、実習や生活で苦楽を共にしました。この期間に、私たちはカルチャー・ショックについて深く学ぶ機会に恵まれ、本当の意味で異文化の受け入れが自分の想像以上に難しいということを感じて理解しました。

「カルチャー・ショック」という言葉は誰しも耳にしたことがあると思いますが、普段の生活の中、私たちが経験するカルチャー・ショックとは殆どの場合、新しいものに対する「好奇心」「憧れ」という感情の中で終わることが多いと思います。しかし、今回の私たちの経験は少し違いました。私たちは、異なる文化を持つサモア人留学生たちをありのまま受け入れようと気遣うことに一生懸命になりすぎ(例えば、日本に着いたばかりで疲れているであろうと気遣い、荷物持ちを頻繁にしたり、食事について考え提案・準備したり等)、自分たちの気持ちや考えを押し殺そうとしてしまいました。そして、その結果、異文化に対する「好奇心」や「憧れ」が徐々に薄れ、精神的な疲れが日々たまってしまったのでした。

サモアでは、家族メンバーそれぞれの役割(例：掃除は妹の仕事など)が決まっており、家族内ではお互いのために何かをすることは当然だとされているそうです。誰かここしてくれる人がいる場合、本人は別のことをするというようなことです。私は日本人として、誰かサポート役がいたとしても、自分のことは可能な限り、自分で行っていくものと考えていました。しかし、それはサモア人の彼らにはない感覚だったようでした。そのため、私たちの彼らへの気遣いは感謝されるどころか、彼らの要求はエスカレートしていくように感じられました。「何故、自分たちは同じ学生なのに、彼らの家政婦のような立ち回りをしてるのだろう…?」と、とても悩みました。ここが、私が一番強く感じたカルチャー・ショックだったと思います。

今回はこちらが受け入れ側という立場から、彼らが日本でより良く過ごしやすいようサポートする「ホスト」とい

う責任を強く感じていました。しかし必ずしも「ゲスト」「ホスト」の関係になる必要はなかったと思います。私たちは共に同じものを学ぶ同志として、互いの考えや思いを共有するチャンスだということを考える間もなく、ホストに徹しようとしたため、このようなショック体験を経験してしまったわけです。



〔サモア交換留学OG/OBとともに 後列右から3人目：澤田〕

さて、このようなカルチャー・ショックに陥っている中、私たちは一体どうするべきだったのでしょうか。私たちはサモア人留学生たちの求めていることをサモア文化の背景を元に生活の支援等を行ってきましたが、実際にはその中にも様々な解釈の違い（文化だけでなく本人の性格）があり、カルチャー・ショックから沢山の異文化の衝突がありました。衝突からは困惑や悲しみなど、負の感情ばかりが多く生まれます。一つの課題を共に協力してなしていくためには、互いにその理解を共有のものにしていく必要があるでしょう。そのために私たちは沢山の話し合いをしました。しかし、思いを伝えるにしても、言い回しによっては同じ意味でも受け取る側の印象は大きく異なることが分かりました。自分の考えをはっきり相手に伝えることは、相手を理解理解されるためには最重要要素であると考えます。その中でも、相手の気持ちや考えも汲んで上手に伝えられることがより望ましい対人関係だと、今回の関わりで学ぶことができました。

この経験が自分の人生をより豊かにする糧になったのではないかと思います。

（本学学部4年生）

### 相互理解に必要なこと ～素直に自分を表現する～

藤田朋香

私は中学の時に青年海外協力隊、高校の時に国境なき医師団の存在を意識し、いつか看護職として、何らかの形で国際協力に携わりたいと思い始めました。そんな私にとって今回の実習は、異なる看護観を持つであろう人と学び合

い、「自分にとって看護は何か」を深く考えるきっかけとなると考えました。これは、どこで活動するにしても自分の強みとなってくる大切なものではないかと思います。サモア学生が来る前は、多少の意見の衝突やカルチャー・ショックはあるだろうと覚悟していましたが、それさえも新しい発見だと楽しみながら乗り越えられると思っていました。

SeipuaとPeteliと過ごした16日間は賑やかで充実した日々でしたが、私はその中で予想以上のコンフリクト（衝突）を体験し、お互いを芯から理解しあうには、心を開いて本音で話し合う必要があるのだと再確認しました。そんなことは当然だとも思うのですが、思っているも実際にそうする事が難しい場面が多々ありました。あえて言葉にしなくても、自分がそうするように相手も、表情や態度、場の雰囲気でもこちらの事を察してくれると期待していると、さらにすれ違いを生む結果になりかねないと実感しました。

実習開始当初は、彼らの要求の多さに戸惑い、どこまでを受け入れ、どこで線を引けばいいのか悩むこともありました。私は、昨年サモアで実習を行った先輩がhospitalityの心を感じたと言っていたことを思い出し、「受け入れ側」という立場もあって、相手が日本に嫌なイメージを持ったり不快な思いをしたりすることを恐れ、自分の疲れや不満を表現できずにいました。しかし、今では衝突を避けずにつづかっていけば良かったと思います。それは理解し合うのに必要なステップであり、簡単なことではないけれど、諦めず、粘り強く、けれども押し付けにならないように分かり合おうと努力することが大切なのだと感じました。



〔帰国見送り 長野駅にて 右端：藤田〕

特に今回は、言語も価値観も習慣も異なり、限られた時間内で看護の話どころか、自分を表現し、相手も理解するということが完璧にできたとは思えません。これから、相手を尊重した上で自分の意見や気持ちを誠実、率直、対等に伝えるためのアサーティブコミュニケーションスキルを磨く必要があると実感しました。

様々なことがあったけれど、二人と過ごした日々は素晴らしく、この実習は多くの人に支えられていたからこそ、良い形で終わることができたのだと感じます。本当にありがとうございました。

（本学学部4年生）

## 広報・交流委員会報告

### 委員長挨拶

本学の委員会は2年を任期としてメンバーの入れ替えが行われ、来年度がちょうどそのメンバー改編の年となります。私は、この3月で本学に赴任して8年を終えることとなりますが、そのうちの6年にわたり、本委員会の1メンバーとして本学の対外的な活動にかかわって参りました。とりわけ、この2年間は委員長として、委員の皆さんの多大なる協力を得ながら、何とかその務めを果たすことができました。本委員会では、年度初めの会議で、仕事の分担を行い、自分の担当する仕事はそれぞれが責任を持って遂行し、必要な場合のみ他のメンバーのサポートを依頼するというシステムをとっており、それがうまく機能しました。これは、自分の仕事をきちんとこなしてくださった本委員会のメンバーの皆様の努力に帰するところ大であり、心より御礼申し上げます。

大学の広報・交流を担当する本委員会の大きな役割は3つです。大学の知的財産・資源を外へ向けて発信する1つの場である「公開講座」、大学を広く知ってもらい、また将来の学生、看護職者をリクルートする目的の「大学説明会・模擬授業」、そして、大学でのさまざまな出来事や教員の活動などを紹介し、学外の皆さんとの交流のアゴラ（広場）としての「学報」です。これ以外にも、本学のホームページの内容チェックや、昭和伊南総合病院を始めとする学外に設置された本学の紹介コーナーの管理、そして、国内外から本学を訪問される方の受け入れ準備など、本学の外向きのことほぼ全般を担当しています。しかし、われわれの仕事はあくまでも企画、準備、そして、行事全般のコーディネートであり、公開講座、大学説明、学報のどれをとっても、その中心的な役割は本学の教職員全員で担っております。その意味で、本年度の広報・交流委員会の業務が無事遂行できましたのも、本学の教職員全体の労を多とするものであります。この場を借りて、御礼申し上げます。

委員会の活動を通じて、学内外の皆さんといろいろな交流をすることができました。そのほとんどの方が迅速、かつ、誠実に対処して下さり、感謝の気持ちに絶えません。大学はしばしば「象牙の塔」に喩えられ社会から隔絶した存在であるかのように言われます。もちろん、ある意味、世間から少し距離をおいて冷静に物事を見ることもわれわれ大学人には必要なことですが、大学での出来事を積極的に世に知らしめ、そして、地域の皆さんとの関わりを大切にする大学づくりが求められている昨今、広報・交流を担当する本委員会の活動への期待はますます高まるものと思われまます。この3月で現在のメンバーは解散し、私も委員長の役を辞します。再任されるメンバーもいるとは思いますが、来年度からは陣容を一新して、これまで以上に積極的な広報・交流活動を推進していただくことを次の委員長、

委員の皆様をお願いして、現委員長の挨拶に代えさせていただきます。

江藤裕之（本学教員：外国語講座准教授・広報／交流委員長）

平成19年度第1回公開講座：平成19年7月14日土曜日

心の病をもつ人々と共に生活するために

講師：松崎緑先生（精神看護学講座専任講師）

精神病、精神病院と聞いてどんなことをイメージされるでしょうか。精神医療の歴史は、誤解と偏見の歴史でもあり、当事者はスティグマ（社会的烙印）と背中合わせで生活しているのが現状です。一方で障害者自立支援法が施行されたこともあり、私たちは心の病をもつ人々とともに地域社会で生きていくことが求められています。お互いが安心して生活するためには、お互いのことを理解することが必要です。

今年度第1回目の公開講座では、精神医療の歴史や、なぜ根強い偏見が存在するのか、精神障害の捉え方についてのお話、更には実際に闘病をご経験された当事者の方をお呼びして対談するといった興味深い内容で、松崎先生よりご講演いただきました。



〔当事者の方と松崎先生（左）との対談の様子〕

テーマへの関心が高く、一般の方々、医療職者、学生、教職員合わせて125名と多くの方にご参加いただきました。「精神障害者への理解が出来た」、「偏見についての考えを新しく知ることができてよかった」、「先生のお話が、当事者の方のお話によってより具体的なものになった」などのアンケート結果からもわかるように、多くの参加者にとって学びの多い講演だったのではないのでしょうか。

また、当日は幻覚（ハルシネーション）をリアルに疑似体験し、当事者の体験に関する理解を深めるためのツールであるバーチャルハルシネーション（VH）を希望者の皆様に体験していただきました。これは、パソコンに接続された眼鏡のようなものを掛けて、そこに映し出される映像や音声を体験するものです。講演にご参加いただいた半数以上の方々がVHを体験されました。その後の感想では、「VHは普段体験することができないので、幻覚は本当に怖いものだった」「貴重な体験ができてよかった」といった声

が多く聞かれました。

今回の講演では、普段は見るできない精神障害を抱える方々の現実を、当事者の方の語りやVH体験といった方法でより具体的に知ることができました。講演に参加した9割以上の方から「満足した」という回答をいただくことができ、多くの方々にとって貴重な体験であったことがうかがえます。

田中真木（本学教員：生活援助学講座助教・広報／交流委員）

平成19年度第2回公開講座：平成19年9月30日 日曜日

「再生」、古代ギリシア神話から現代医療の現場へ

講師：喬炎先生（看護形態機能学講座教授）

9月30日、日曜日、本学大講義室にて第2回公開講座が開かれました。講師は本学看護形態機能学講座の喬炎教授で、「『再生』、古代ギリシア神話から現代医療の現場へ」というテーマでご講演いただきました。講義の内容は以下のとおりです。

臓器再生の記述は古くからあり、古代ギリシア神話の一説にもでてきます。ゼウスの怒りを買ったプロメテウスは、山の頂にはりつけにされ、ハゲタカに腹を裂かれ肝臓をついばまれます。しかし、不死である彼の傷は夜ごと回復するため、拷問として半永久的に肝臓をついばまれたというものです。当時のギリシア人が、肝臓が再生可能な臓器であることを知っていたかどうかは別にして、肝臓は再生能力の高い臓器であることが現在の生体肝移植で証明されています。



〔喬先生の公開講座の様子〕

しかし、臓器は再生できるものより、心臓や脳神経のように一度死んでしまうと再生できない場合がほとんどです。こうした臓器が病気などで十分に機能しなくなった場合、臓器移植が一つの治療方法になります。しかし、現状では拒絶反応や提供臓器の不足などの問題があります。そこで、ヒトの臓器を人間の手で作るという発想が出てきました。これが再生医療（医学）の原点です。再生医学は80年代後半に現れた概念で、日進月歩の急速な進歩を遂げています。ところが、ここでも倫理社会的な問題が大きな壁となって

います。あらゆる臓器の大本であるES細胞（胚性幹細胞）は受精卵に在り、その取り扱いについては「生命誕生の定義」をめぐる宗教、倫理社会的な論争が起こっています。そのため動物実験ではES細胞を用いた研究の成果が上がっているのですが、ヒトの研究が制限されているのが現状です。そこで、ES細胞に近い性質を持つ生体幹細胞を使っての研究がすすめられています。

また、喬先生は再生医療の基礎技術となるクローン技術についても、クローン羊として有名なドリーが通常の生殖で生まれなかったことを例に挙げ、わかりやすくお話しされました。そして、ドリーがたくさんの病気を抱えていたことから、クローン技術の課題も提示されました。さらに、ご自身の臨床経験から、病気で欠損した患者さんの組織（外耳）を元通りにすることができればと再生医療への関心を持たれたことや、パーキンソン病の治療などで用いられている再生医療の実際の応用例、これまで利用されていなかった脂肪細胞や羊膜が持つ再生医療分野での有用性についてもお話しされました。再生医療が進歩し、自身の細胞から失われた臓器が再生できれば、患者さん達は臓器移植や拒絶反応にまつわる不都合や苦しみから解放されます。再生医学は、かつての古代ギリシアのおとぎ話から現代医療の現場で実際に応用されるまでになっています。

講義終了後の参加者からは「研究が進めばこれまで治らなかった病気が治るのではないか」「喬先生に頑張ってもらいたい」といった声が聞かれました。また、回収されたアンケートでは「ギリシア神話から始まり、現代の再生医学の可能性を知ることができて満足しています」「再生医療についての理解が大変深まり、日常生活の中でES細胞が活かされるのを楽しみにしています」といった意見が寄せられ、再生医療への理解が深まったことと喬先生への期待がうかがえました。

高濱圭子（本学教員：精神看護学講座助教・広報／交流委員）

平成19年度第3回公開講座：平成19年12月15日 土曜日

サプリメントの基礎知識

講師：岩月和彦先生（病態・治療看護学講座教授）

健康ブームを背景に、食生活の偏りを改善したり、健康の維持・増進を図ったりする目的でサプリメントを利用する人が増えています。サプリメントとは『体に必要な栄養成分や特定の働きをする成分を補う食品』を言い、あくまでも栄養補助食品です。サプリメントについてテレビや雑誌にも取り上げられていますが、結構いい加減です。中にはまるで正反対のことが書かれていることもあります。

そこで今回の公開講座では、『サプリメントの基礎知識』と題して、サプリメントとは何か、効果を高める摂り方、サプリメントの正しい利用方法や摂る場合の注意点などについて、一般の方にもわかりやすい内容で岩月先生よりご

講演いただきました。

皆様の関心が高いテーマだったようで、一般の方、医療関係者、学生・教職員合わせて150名と本当に多くの方がご参加くださり、そのほとんどの方から「満足した」との声をいただきました。講演終了後には活発な意見交換がなされ、健康維持のための食に対する、一般の方々の関心の高さにあらためて気付かされました。



〔公開講座終了後に岩月先生（左）へ学生から花束贈呈〕

終了後のアンケートでは、実際にサプリメントを摂取している方から「サプリメントは体によいばかりではなく、過剰摂取や副作用が生じることもあり注意して選ばなければと思った」、「今までの生活を見直すことができた」などといった感想が寄せられるとともに、「非常にわかりやすく一般市民を相手にかみくだいた内容であり大満足」と、一般の方々に向けた岩月先生の配慮が際立った感想が多くありました。さらに「バランスのとれた食事についてももっと聞いてみたい」などといった今後の公開講座への期待も寄せられました。

また、岩月先生は今年度末をもって定年退官されるため、質疑応答終了後には学生と教職員からの花束と記念品贈呈が行われ、会場は盛大な拍手で幕を閉じました。

宮澤美知留（本学教員：母性看護学講座助手・広報／交流委員）

（大学説明）

## オープンキャンパス、 鈴風祭における大学説明

平成19年度のオープンキャンパスは、去る海の日7月16日（月）13：00～15：00の日程で開催されました。年々高校からの大学説明の依頼が多くなる中、オープンキャンパスへの来場をお願いする旨を高校側に伝えてきたこともあり、多くの参加者を迎えての開催となりました。最終的に県内外より高校生・予備校生229名、このほかに専門学校生・社会人6名、保護者140名、高校教員5名などを合わせ、382名がオープンキャンパスに集まりました。

当日のプログラムは、第1部として講堂において本学の概要説明を行いました。深山学長の挨拶の後、安田教務委員長からは本学の教育理念と平成20年度入学者選抜の要項についての説明、平澤学生支援員・征矢就職支援員からは

本学の学生生活や卒業後の進路についての説明、本学4年中村有紀子さんからは大学生活で得たものとして先輩からのメッセージが伝えられました。会場からは、どのような学生の入学を望んでいるのか、寮生活に向けての準備についてなど、いくつかの質問が出され、それぞれに安田教務委員長や平澤学生支援員からの説明がありました。中村有紀子さんの講話では、自分の大学4年間の体験をお話ししていただき、教員と登山をした体験や海外での看護体験に、会場の参加者が吸い込まれるように聴き入っていたのが印象的でした。

休憩の後、第2部では本学学生がツアーガイドを務めるキャンパスツアーを提供しました。キャンパスツアーには365名が参加し、約25名ずつのグループに分かれて学内外の施設をめぐり、それぞれの見学場所に待機していた本学教員から施設・設備の説明や案内を受けていました。別々の実習室を見学する2つのルートを設定したことにより、比較的スムーズにツアーが流れていたようです。しかし、学生寮の見学は希望者のみの予定ではありましたが、ほぼすべての方が見学希望をされたことにより、1部屋に全員が入りきらずに混雑しあい、寮の前で待機していただく状況があり、参加者の皆さまにご迷惑をおかけいたしました。

保護者・教員および社会人・編入生向け個別説明コーナーにも、多くの方が相談に見えられました。それぞれツアーから講堂へ戻ったところで三々五々解散という流れでしたが、戻ってきた高校生や親子はすぐには帰らず、その場に居合わせた本学教員やガイドを務めた学生と交流をする姿もみられました。本学ならではのアットホームなオープンキャンパスとなったようです。



〔キャンパスツアーを担当する本学のボランティア学生〕

秋に行われた鈴風祭においては、1日目の9月29日（土）に大学説明コーナーを設けて、本学への進学や本学での教育等に関する説明を行いました。6名の広報・交流委員以外にも教務委員2名、学生委員2名の協力を得て、午前中は20組、午後は9組の相談に応じました。昨年同様に、午前中の来談者の出足が早く、開始時間の10時には既に大勢の人が待機している状況でした。来談者は県内のみならず、県外からも多数みられており、また、社会人入試に関する相談もみられていました。

酒井久美子（本学教員：地域看護学講座助教・広報／交流委員）  
大脇百合子（本学教員：小児看護学講座助教・広報／交流委員）

(大学説明)

## 高校での説明・模擬授業、高校生の大学見学

今年度、高校での大学説明・模擬授業は12回、高校生の大学見学は6回行われました(平成19年12月現在)。教員の都合がつかないために、やむを得ずお断りした大学説明会も9回ありました。

大学説明・模擬授業については、多くの教員の協力を得て、実際に大学で行われている講義を高校生向けにアレンジした模擬授業を実施したり、大学説明の後で高校生や教員の進路相談に応じたりしました。昨年度より、各高校で単独で行われる機会のみならず、ホテルや多目的ホール等を利用した進路相談委託業者主催の大規模な合同ガイダンスが増加しているのが特徴と言えます。今年度は長野県・長野県看護協会主催の「看護の心ミニ講座・進路相談会」という取り組みも行われ、看護についての理解を深めるために、本学卒業生を含む地元の看護職者の方にお話をしてもらった機会もありました。対象となる生徒は学校ごとに異なりますが、高校1年生から3年生まで幅広く設定されていました。参加した生徒からは、本学の難易度や偏差値等の受験に関すること、看護学を専門学校ではなく大学で学ぶことの意義、取得できる免許や就職先について、寮生活を送る上での不安、教員の臨床活動経験で印象深かったこと等についての質問が出されていました。後日、オープンキャンパスや鈴風祭、本学教員による公開講座等で本学を訪れる参加者も多数みられていました。



〔本学付属図書館を見学する高校生〕

高校生の大学見学参加者は、高校1年生、2年生が中心で、大学進学への意識を高める、学部・学科の特色を把握するといった目的で実施されていました。内容は、本学の概要説明、施設見学を中心に行いました。施設見学では、大講義室や演習室、情報処理教室、LL教室といった様々な教室や、成人看護実習室、地域・老年看護実習室、基礎看護実習室、母性・小児看護実習室を状況に応じて案内しました。大講義室や情報処理教室などでは、広い教室や新しい設備に関心をもった様子が伺えました。実習室では、本学の学生がその場で演習を行っている時もあり、看護実習の様子が少し想像できたのではないかと思います。また、

体育館、図書館、室内温水プール、有酸素運動研究コース、すずらん寮、講堂についても案内を行い、興味深く施設を見てまわる姿が数多くみられました。また、昨年度より大学生協の協力を得て、食堂の利用も行っています。来訪した高校生の中には、昼食を楽しみに来たという声もあり、食堂で昼食をとって大学見学を終えるというコースができつつあるかと思われます。今後も多くの教職員の協力を得ながら、本学への進学につなげることができるような大学見学を目指したいと考えます。

大脇百合子(本学教員:小児看護学講座助教・広報/交流委員)  
酒井久美子(本学教員:地域看護学講座助教・広報/交流委員)

## ホームページ担当からの報告

昨年度の学報でも報告しましたが、今年度の課題として①「管理・運営に関する曖昧さや課題に対して大学全体で取り組むこと」と、②「大学HPの刷新を図ること」を掲げました。①はホームページに関する実務作業の担当がバラバラであり、とても効率が悪いという問題がありました。私の主な役割は、教員の自己紹介の更新や全体的な内容のチェックであり、更新が必要なページに対してその都度ページ担当者に伝えることです。しかし、ページが更新されるまでに時間を要したり、時には更新作業を誰に頼んだらよいのかが分からず困ったりしたこともありました。②はもっともっと魅力的なホームページを作りたいという我々の希望が背景にありました。

これらの課題に対して、まずは広報・交流委員会の江藤委員長がネットワーク推進委員会と事務局に問題提起をして何度か会議を持ち、問題点の整理とそれへの対応を協議されました。すぐに対応されたのがウェブサイトのチェック担当者および実務作業の担当者リストの作成でした。このように江藤委員長が素早く対応してくれたことで、私は6月からこの担当者リストの内容に従って、本学ウェブサイトのコンテンツを随時チェックし、更新の必要が認められたページは、その担当者にスムーズに依頼をすることができるようになりました。このリストはかなり画期的です!なぜ、今までこのリストを作成することを思いつかなかったのだろうかと反省しました。その他に、内容チェックの厳格化とシステム化、ガイドラインの見直しなどの課題がありますが、これはホームページ運営会議で現在協議中であります。

次に、ホームページのリニューアルに関してですが、現在のホームページをより魅力的にするためにメニューやカテゴリーの再考が必要であり、そしてコンテンツ更新に関連した作業の不便さを解消するための考案が必要となります。これも現在進行中ですので、来年度の持ち越しとなりそうです。

太田規子(本学教員:基礎看護学講座助教・広報/交流委員)

# 長野県看護大学同窓会（鈴風会）からのお知らせ

向春の候、皆様方におかれましてはますますご健勝のことと存じます。

鈴風会では、同窓会発足当初から“会員のネットワークづくり”と“母校とのつながりを強化”という基本方針を立てております。2年前の2006年2月に『同窓会のホームページ』を立ち上げ、またメーリングリストも開設いたしました。これらに関しては、昨年度末に同窓会より会員のみなさま宛にお知らせを発送しておりますので、ぜひ読んでみてください。



長野県看護大学同窓会「鈴風会」  
アクセスしてみてください！

⇒ [http://www.suzukazekai.com./](http://www.suzukazekai.com/)

皆様からのご意見を多数お待ちしております！

ホームページでは公開講座など大学行事の様や、会長をはじめとする役員をつぶやきをブログに書いています。そろそろ大学の雰囲気を感じたい…という方は、ぜひ上記のURLへアクセスしてみてください。皆様からのご意見やご助言をいただきながら役員一同、母校の発展に寄与していけるよう努力してまいりたいと思います。

## 第5回 同窓会総会開催

|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 日 時 | 平成20年3月14日（金） 12:30～13:15          |
| 場 所 | 長野県看護大学 中講義室4                      |
| 内 容 | 今年度活動報告、来年度活動報告、今年度決算報告、来年度予算案、その他 |

当日は大学の研究集会が開催されておりますので、その合間の同窓会総会開催となります。お忙しいと存じますが、ご出席をお願いいたします。なお、今回も昨年と同様に「ランチョン総会」を予定しております。人数分のランチを準備しますので、総会にご出席される方は、総会のお知らせに同封してある出席確認ハガキを返信していただければ幸いです。

## 会費納入のお願い

同窓会は皆様の会費で運営されます。終身会費で一万円です。振込み先は以下の通りです。

郵便局普通預金口座 口座番号：0581-1-79696 加入者名：長野県看護大学同窓会鈴風会

会費納入いただいた同窓生の皆様には、同窓会より記念品として「ロゴ入りはさみ」を差し上げます。

未入会の方は、この機会にぜひご入会くださいますようお願いいたします。

今年度も、どうぞよろしくお願いたします！

同窓会役員一同



ご質問・ご意見は下記連絡先へ

長野県看護大学同窓会

〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694番地

Fax；0265-81-1256

E mail；suzukazekai\_20@suzukazekai.com

（文責：鈴風会 庶務係 吉田聡子）

# 平成19年度卒業・修了予定者の進路状況について

平成20年1月31日現在 就職支援課

本年度の学部卒業予定生は84名、大学院博士前期課程修了予定生は11名、同後期課程修了予定生はおりません。現時点での進路予定状況は以下のとおりです。

## 1. 学部学生の進路内定状況

| 区 分       |     |     | 就 職 |     |     |        |                | 進 学 | 合 計 |
|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|--------|----------------|-----|-----|
|           |     |     | 看護師 | 保健師 | 助産師 | 教員(助手) | 小 計            |     |     |
| 全<br>体    | 地 域 | 県 内 | 29人 | 6人  | 6人  | 1人     | 42人<br>(51.9%) | 0人  | 42人 |
|           |     | 県 外 | 35  | 1   | 3   | 0      | 39<br>(48.1%)  | 2   | 41  |
|           | 計   |     | 64  | 7   | 9   | 1      | 81<br>(100.0%) | 2   | 83  |
| 県内<br>出身者 | 地 域 | 県 内 | 26人 | 6人  | 5人  | 1人     | 38人<br>(46.9%) | 0人  | 38人 |
|           |     | 県 外 | 16  | 0   | 0   | 0      | 16<br>(19.8%)  | 1   | 17  |
|           | 計   |     | 42  | 6   | 5   | 1      | 54<br>(66.7%)  | 1   | 55  |
| 県外<br>出身者 | 地 域 | 県 内 | 3人  | 0人  | 1人  | 0人     | 4人<br>(4.9%)   | 0人  | 4人  |
|           |     | 県 外 | 19  | 1   | 3   | 0      | 23<br>(28.4%)  | 1   | 24  |
|           | 計   |     | 22  | 1   | 4   | 0      | 27<br>(33.3%)  | 1   | 28  |
|           |     |     |     |     |     |        | 家 居            | 1   |     |

小計の下段の％は就職者81人に対する割合

全体から見ると

- ①県内への就職者総数は42人／81人（51.9％）で昨年より16.7％、一昨年より10％程減少し、増加傾向にあった県内就職内定数が激減したことが本年度の大きな特徴となった。これは大学病院など大型病院への就職志向が急速に強まる中、昨年度より県外出身学生数が多く、県内出身者の県外流出が増えたことなどが要因と考えられる。（県内出身者の県内就職者は38人／54人（70.4％）で、昨年比9％の減少。）
- ②県外出身者の県内就職者は4人／27人。一方、県内出身者の県外就職者は16人／54人、流入失差は12名（昨年度は4名）で県内就職者数の減少の要因ともなった。
- ③保健師7名の内訳は県内自治体6名で昨年より3名の減員。求人数は町村まで含めれば希望者全員の枠は充分あるが、都市部志向が強く希望者が特定の自治体に集中した結果、希望が叶えられなかった者が多かった。採用試験の期間に幅があり（6～11月）、受験準備や就職活動との絡みで調整が難しい面がある。
- ④資料の記載を省略したが、求人数は、件数、採用人数ともに昨年度より大幅増。百名単位で募集する病院もあった。
- ⑤進学者は2名。（京都大学大学院1名、新潟大学養護教員養成別科1名。）

その他 1名（家居）

## 2. 学部学生の主な就職内定先（複数のみ記載）

県 内

10人 信州大学医学部附属病院 5人 長野市民病院 4人 伊那中央病院

2人 上伊那生協病院 佐久総合病院 篠ノ井総合病院 諏訪赤十字病院 長野赤十字病院 松代総合病院

県 外

5人 虎の門病院

2人 北里研究所病院 杏林大学医学部附属病院 千葉大学医学部附属病院

東京大学医学部附属病院 名古屋大学医学部附属病院 日本赤十字社医療センター

## 3. 大学院前期課程の就職内定先

3人 長野県看護大学 2人 佐久総合病院 1人 阿南町役場・長野赤十字病院 その他 未定（4人）

## 4. 大学院後期課程の就職内定先 該当者なし

# 2008年度 学 年 暦

| 前 期  | 後 期   |
|--|---|
| 4月7日(月) 入学式・後援会総会                              | 10月1日(水) 後期授業開始(学部、大学院)   |
| 4月8日(火) オリエンテーション合宿<br>(学部新入生・新編入生)            | 大学院履修登録(後期追加)開始   |
| 4月9日(水) " "                                    | 10月7日(火) 博士論文発表会〔前期〕(博士課程3年)  |
| 4月10日(木) 学内(履修)ガイダンス・定期健康診断                    | 大学院履修登録(後期追加)終了   |
| 4月11日(金) " "                                   | 10月13日(月) 「体育の日」  |
| 4月14日(月) 前期授業開始・履修登録開始(学部、大学院)                 | 10月20日(月) 博士論文計画書テーマ・研究方法概要提出期限<br>〔後期〕(博士課程2年)   |
| 4月15日(火) 看護コミュニケーション実習Ⅰ(1年)<br>～7月1日(火)        | 11月3日(月) 「文化の日」   |
| 4月18日(金) 修士論文研究テーマ提出期限(前期課程2年)                 | 11月10日(月) 博士論文研究計画書提出期限〔後期〕<br>(博士課程2年)   |
| 4月21日(月) 履修登録終了                                | 11月24日(月) 「勤労感謝の日」振替休日  |
| 4月21日(月) 博士論文計画書テーマ・研究方法概要提出期限<br>〔前期〕(博士課程2年) | 11月25日(火) 博士論文研究計画発表会〔後期〕<br>(博士課程2年)   |
| 4月29日(火) 「昭和の日」                                | 12月2日(火) 博士論文審査開始願〔後期〕(博士課程3年)  |
| 4月30日(水) 休校日                                   | 12月22日(月) 冬季休業(学部、大学院)<br>～1月9日(金)  |
| 5月1日(木) 創立記念日                                  | 12月23日(火) 「天皇誕生日」振替休日   |
| 5月2日(金) 休校日                                    | 1月12日(月) 「成人の日」   |
| 5月3日(土) 「憲法記念日」                                | 1月13日(火) 後期授業再開(学部、大学院)   |
| 5月4日(日) 「みどりの日」                                | 2月11日(水) 「建国記念日」  |
| 5月5日(月) 「こどもの日」                                | 2月13日(金) 後期授業終了(4年生、編入生)  |
| 5月6日(火) 振替休日                                   | 2月16日(月) 看護コミュニケーション実習Ⅱ(2年)<br>～27日(金)  |
| 5月12日(月) 領域別実習(4年)<br>～7月11日(金)                | 2月16日(月) 春季休業(4年生、編入生)<br>～3月31日(月)   |
| 5月12日(月) 博士論文研究計画書提出期限<br>〔前期〕(博士課程2年)         | 2月25日(水) 大学院・春季休業<br>～3月31日(月)  |
| 6月3日(火) 博士論文研究計画発表会<br>〔前期〕(博士課程2年)            | 3月2日(月) 後期授業終了(1・2・3年)  |
| 6月17日(火) 看護コミュニケーション実習Ⅰ(1年)<br>～19日(木)         | 3月3日(火) 春季休業(1・2・3年)<br>～3月31日(月)   |
| 7月11日(金) 博士論文審査開始願〔前期〕(博士課程3年)                 | 3月中旬 卒業式・修了式  |
| 7月14日(月) 基礎実習(2年)<br>～8月8日(金)                  | 3月20日(金) 「春分の日」   |
| 7月21日(月) 「海の日」                                 |   |
| 7月28日(月) 夏季休業(4年、編入生)<br>～8月29日(金)             |   |
| 8月8日(金) 前期授業終了(1・2年・3年、大学院)                    |   |
| 8月11日(月) 夏季休業(学部1・2年・3年、大学院)<br>～9月30日(火)      |   |
| 8月22日(金) 博士論文提出期限〔前期〕(博士課程3年)                  |   |
| 9月1日(月) 前期授業再開(4年、編入生)                         |   |
| 9月8日(月) 総合実習(4年)<br>～9月22日(月)                  |   |
| 9月15日(月) 「敬老の日」                                |   |
| 9月23日(火) 「秋分の日」                                |   |
| 9月24日(水) 領域別実習(3年)<br>～12月19日(金)               |   |
| 9月30日(火) 前期授業終了(4年生、編入生)                       |   |
|  | <p>(参 考)</p> <p>2007年度</p> <p>9月29日(土)・30日(日) 鈴風祭</p> <p>3月8日(土) 卒業式・修了式</p> <p>2月21日(木) 助産師国家試験</p> <p>2月22日(金) 保健師国家試験</p> <p>2月24日(日) 看護師国家試験</p> <p>3月26日(水) 合格発表</p> |

## 自宅から文献取寄せと貸出図書確認ができます！

☆教員・院生は2007年12月から、学生は2008年2月よりスタート

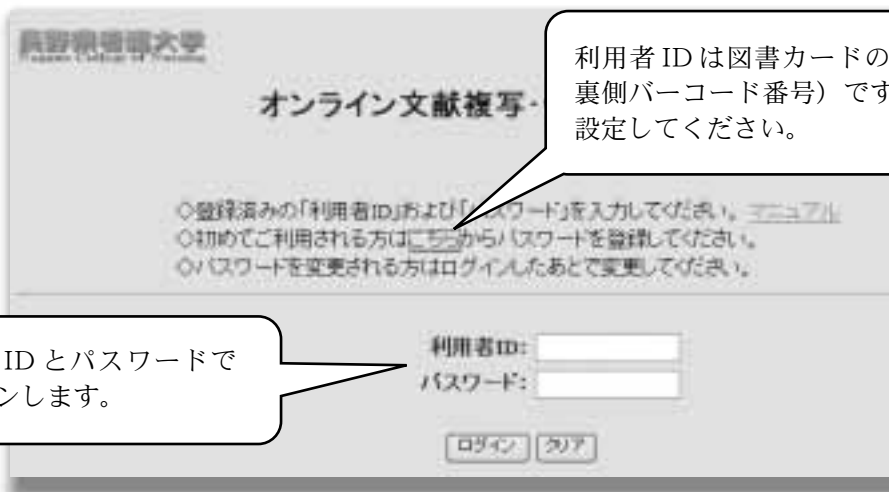
①



長野県看護大学付属図書館トップページ

(<http://www.naganonurs.ac.jp/library/index.html>)よりここをクリック。学内からは「学内LAN」を、学外からは「学外」をクリックしてください。

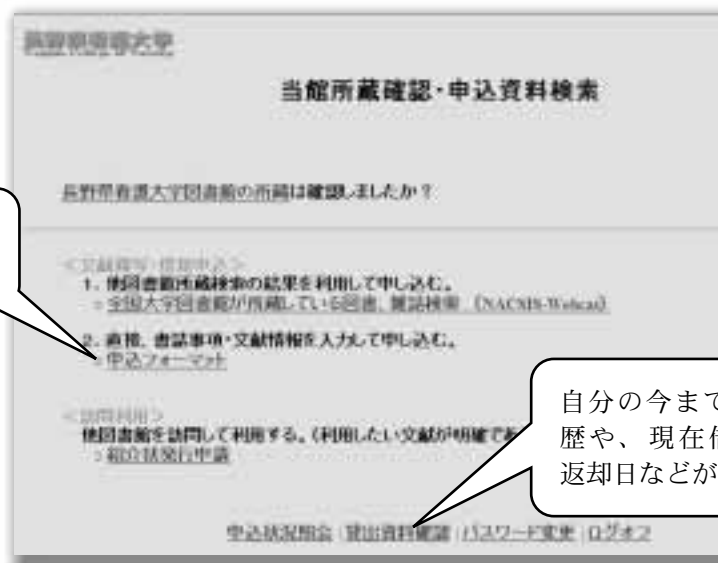
②



利用者IDは図書カードの番号（学生は学生証裏側バーコード番号）です。パスワードは各自設定してください。

利用者IDとパスワードでログインします。

③



文献はここから申し込みます。

自分の今まで借りた図書の履歴や、現在借りている図書、返却日などがわかります。

●文献が届いた際にはお知らせメールでご連絡します！ どうぞご利用下さい。